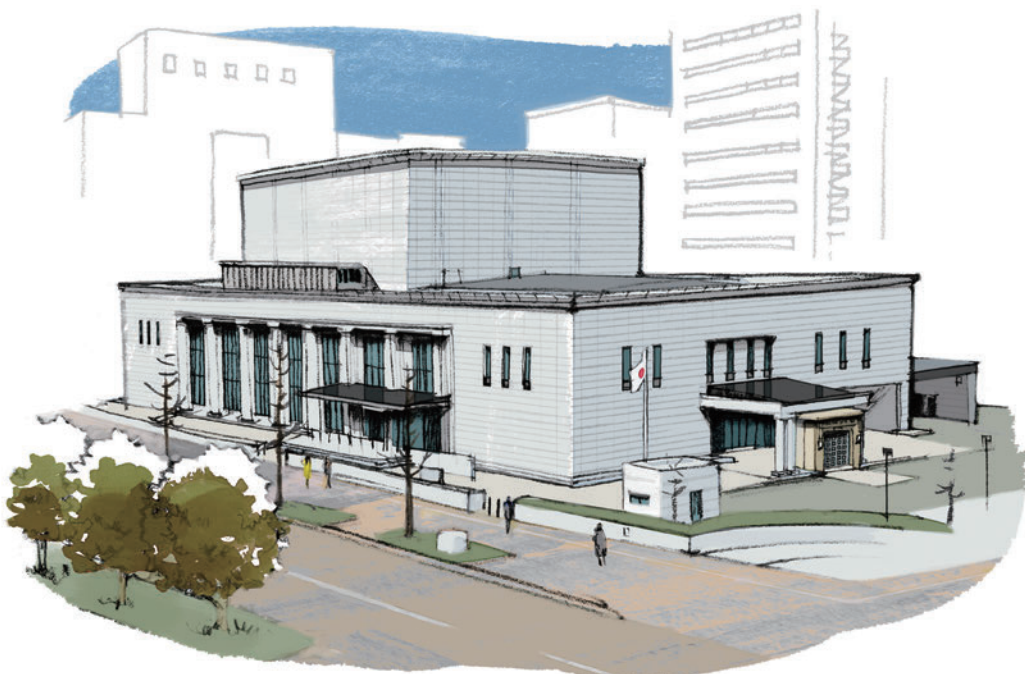


にちぎん

2022 NO.72

冬



インタビュー 扉を開く

岡島喜久子 日本女子プロサッカーリーグWEリーグ 初代チエア
「ガラスの天井」を壊す力

地域の底力

北海道阿寒郡鶴居村
先人の尽力を礎に未来を開拓する北海道鶴居村

対談 守・破・創

佐藤允彦 ジャズピアニスト

野口 旭 日本銀行政策委員会 審議委員
ジャズは互いの呼吸を読むコミュニケーションツール

エッセイ “おかね”を語る

夏井いつき 俳人 子規とお金

俳人の「俳」とは、人偏に非。我が身を含めて、変人も多い。変人といつても、様々な変わりようがあるが、自分の墓碑銘に月給の額を記すというのは、なかなかの変人である。

俳人の名は、正岡子規。結核性の病気で脊椎カリエスという、当時でいえば不治の病を抱え、三十六歳で亡くなった男だ。

死の四年前、彼は自らの手で墓碑銘を記した。自分の名前、幼名、俳号を書き連ね、「伊豫松山二生レ東京根岸二住ス」と生地と居住地を書き、父母にも触れ、さらに「日本新聞社員タリ」と自分の職業を記し、最後に「明治三十〇年〇月〇日没ス享年三十〇月給四十圓」と結ぶ。言うまでもなく、〇の部分には、実際に自分が死んだ日付や年齢が入るというわけだ。

ここまで読んだだけでは、暗い悲愴感を抱く読者もおられるだろうが、子規自身はいたって明るい。そこが変人たる所以でもある。

俳句仲間であり野球仲間であった友人から、シャンパンが贈られてきた。それがすこぶる美味しかった。感激した子規は、そのお札状に、こんな墓碑銘を添えるのだから、やはり変わっている。

面白がって書いてはいるが、自分が三十代で死ぬことは覚悟している。自分を客観的に眺めつつ、真面目にふざける。子規はそんな



絵・江口修平

子規とお金

夏井いつき

変人であったのだろう。

若い頃（といつても、弱冠三十六歳で亡くなるのだが）、お金にルーズであった子規だが、病気を得て後の著書『仰臥漫録』には、モノの値段が「オミヤゲ焼栗一袋（十個人二錢）」「夕飯 鰯二尾（十四錢）」という具合に記されていたり、俳句仲間たちの家賃のリストが「虚子（九段上）十六圓」「碧梧桐（猿樂町）七圓五十錢」「秀真（本所緑町）四圓（置建具ナシ）」と書かれていたりするのも可笑しい。

萩咲て家賃五円の家に住む 子規

墓碑銘に「松山藩御馬廻加番タリ」と記される父隼太が亡くなった後、長男としての自分を思う。月給が三十圓になった時、子規は、母や出戻りの妹を養うことができること喜ぶ。結核菌に侵され、腰からダラダラと膿を出し続けつつ、母や妹の看病に頼りつつも、一家の長として稼げていることが子規の誇りだ。そしてそれは、一家三人が日々のご飯を頂ける大きな安堵でもあったろう。

墓碑銘に刻んだ「四十圓」は、働いてきた己の価値を己に納得させる数字であり、こんな墓碑銘を書いてから死ぬ自分を大いに楽しむ、変人ならではの快活なユーモアでもあるのだ。

なついいつき●俳人。1957年生まれ。松山市在住。俳句集団「いつき組」組長、藍生俳句会会員。第8回俳壇賞受賞。第72回日本放送協会放送文化賞受賞。第4回種田山頭火賞受賞。俳句甲子園の創設にも携わる。帝塚山学院大学客員教授。松山市公式俳句サイト「俳句ポスト365」等選者。2015年より初代俳都松山大使。句集『伊月集 鶴』、『夏井いつきのおウチ de 俳句』、『瓢箪から人生』等著書多数。



写真：御厨慎一郎



2 エッセイ／“おかね”を語る
子規とお金 俳人 夏井いつき

4 インタビュー／扉を開く
岡島喜久子 日本女子プロサッカーリーグ WEリーグ 初代チェア
「ガラスの天井」を壊す力



9 地域の底力——北海道阿寒郡鶴居村
先人の尽力を礎に未来を開拓する北海道鶴居村



16 対談／守・破・創
佐藤允彦 ジャズピアニスト
野口 旭 日本銀行政策委員会 審議委員
ジャズは互いの呼吸を読むコミュニケーションツール

20 FOCUS→BOJ ④ 金融研究所 40 周年
時代を読み、時代をリードする
日本銀行のCOE (Center of Excellence)としての役割

日本銀行のレポートから

24 「経済・物価情勢の展望」(展望レポート) —2022年10月—

26 「金融システムレポート」 —2022年10月—

32 トピックス
旧小樽支店金融資料館特別展「渋沢栄一にまつわるお金のはなし
—新しいお札の肖像—」開催中! ほか



35 AIR MAIL from Singapore
シンガポール子育て事情

※取材は感染対策を徹底して実施しています。
本誌は12月5日(月)までの情報をもとに掲載しています。

表紙のことば

日本銀行福岡支店の初代店舗は、昭和十六年(一九四二)に県から譲り受けた産業奨励館を改装して開設されました。

その後、昭和二十六年(一九五二)に建設された二代目店舗は、福岡市の中心地である天神地区に位置し、建物はルネッサンス建築で、日本銀行の営業所としては、戦後初の鉄筋コンクリート造りでした。

三代目となる表紙の店舗は、二代目店舗の老朽化等を踏まえ、約四半にわたる工事を経て、令和四年(二〇二二)に完成しました。

歴史の一部になることも意識してデザインされた建物は、内玄関に旧営業所の正面玄関外装(門型)を移築するなど、旧営業所の意匠を一部残しています。また館内の雰囲気も旧営業所のクラシカルな趣が受け継がれています。

新店舗となった福岡支店は、今後も九州地区全体の経済を見守り続けていきます。

※三代目新店舗については、広報誌「にちぎん」二〇二二年秋号「FOCUS」↓

BOJ ④日本銀行文書局 福岡支店移転プロジェクト」に記事を掲載しています。



表紙・画 北村公司

岡島喜久子

OKAJIMA Kikuko

日本女子プロサッカーリーグ WEリーグ 初代チエア

二〇二一年九月に開幕した日本初の女子プロサッカーリーグ「WEリーグ」。その初代チエア（理事長）を務めた岡島喜久子さんは、女子サッカー黎明期れいめいに選手として国際大会に出場したアスリートのキャリアと、金融機関で三八年間活躍したビジネスパーソンのキャリアを併せ持つ人物だ。サッカー界でも金融業界でも女性というだけで行く手を阻まれそうになったが、情熱と行動力でいわゆる「ガラスの天井」を突破した。これまでの歩みを振り返っていただいた。



取材・文 小堂敏郎

写真 野瀬勝一

「ガラスの天井」を壊す力

日の丸を「袖」につけて 戦った初の国際試合

——岡島さんは一九七〇年代から日本女子サッカーのパイオニアとして活躍されましたが、どのようなきっかけでこの競技を始めたのでしょうか。

岡島 サッカーは中学生で始めました。小・中学校一貫の東京学芸大学附属竹早中学校に通っていましたが、小学校時代にドッジボールと一緒に遊んでいた男の子たちが中学校でサッカーをしているのを見て、私にもできないはずはないと。サッカー部の顧問にお願いしたところ、すぐ入れてくださいました。でも、女子は試合には出られないので、『サッカーマガジン』でFCジンナンという女子チームの募集広告を見つけて入ったんです。当

時、女子チームは東京に四つぐらいしかなくて、試合相手を見つけないのも大変でした。

——サッカーにどのような魅力を感じたのでしょうか。

岡島 純粹にボールを蹴るのが楽しいし、サッカーが大好きな人たちとプレーするのも楽しい。FCジンナンで練習しながら、高校のサッカー部のマネージャーや男子の試合の審判もしました。中学も高校も本当にサッカー一筋でしたね。七七年には台湾で開催されたアジア女子選手権にFCジンナンのメンバーとして出場したんです。

——日本の女子サッカーにおける初の国際試合でしたが、FCジンナンは日本代表として出場

できなかったそうですね。

岡島 日本サッカー協会に女子チームは登録されていなかったからです。当時、アジアサッカー連盟から日本サッカー協会に「女子の大会を開くから参加してほしい」と手紙が来ていたようですが、女子の登録チームがなかったのでも「いないもの」として扱われていたのです。私たちは協会と交渉し、大会参加を黙認してもらったんです。ただし、「協会に登録していない単独チームでの参加だから、胸に日の丸をつけられませんかよ」というのが条件でしたので、仕方なく、袖に日の丸をつけて戦いました。

驚いたのは、どの対戦相手も代表チームだったこと。国旗を胸につけているんです。マレーシア、シンガポール、タイ……サッカーの強国でもないのに、女子サッカーがちゃんと認めら

れているんですね。そんな相手と戦って、私たちは全敗。大会期間中に選手同士で仲良くなり、私は英語が急に上達しましたが、成果はそれくらいでした。

大学は早稲田大学の商学部に進学しました。実家が呉服問屋で、経済を身近に感じながら育ったからです。一方で、日本サッカー協会が四年間アルバイトを続けました。女子の日本代表チームをつくりたいという思いからです。協会の中の人からいろいろ話を聞くと、まず受け皿が必要だと分



FCジンナンでプレーしていた頃（本人提供）

(注) Letter of Credit。国際的な貿易取引において、銀行が作成する支払いの確約書。

外資系銀行から国際証券会社へ 迂回して花開いたキャリア

かり、それなら女子サッカー連盟をつくらうと。当時、女子サッカー部を創設した三菱重工の方々も力を貸してくださり、実現しました。私は下働きに奔走したことが認められ、連盟の理事の一人に選ばれたんです。現役サッカー選手、サッカー協会の学生アルバイト、そして日本女子サッカー連盟理事。三つを掛け持ちすることになりました。

日本サッカー協会が女子選手の登録を始めたのは七九年。約九〇〇人、五〇チームが登録し、全国大会も始まり、八一年には初の日本代表チームが結成されました。私はその頃、アメリカに留学していたので、代表チームには入っていないんです。チームの初戦を見ることもできませんでした。思いは現実になるんだと身をもって知りました。

ぐの頃でしたから。

バックオフィスの経験だけでは将来しつかり仕事を続けられないと感じていました。審査業務などのトレーニンングを受けたいと幹部になれないと同僚からも言われました。そこで「社内でのニューヨーク研修に行かせてください」と手を挙げたんです。それまでずっと男性が選ばれてきて、その時も男性の候補者がいました。でも彼は英語が苦手。それをアメリカ人の上司が不安に感じていた。結局「すごく行きたいんです！」と英語で訴える私に変更してくれたんです。

研修は厳しかったですね。コンビニア大学大学院の先生が会計学やコーポレートファイナンスなどを一年間教えてくれるのですが、試験で七〇点を取れないとクビになる。でも私、競争する場に置かれると自然と頑張ってしまうんです。

——せっかくアメリカで切磋琢磨^{せつさく}していらしたのに、日本に戻られてから、そうした能力を発揮する機会が与えられないということにならなかったのでしょ

うか。

岡島 なったんです。当時の日本では、女性はアナリストの仕事ならいいけれども、法人向けの営業を任すことはできないという雰囲気がありました。そこで、私は営業職を希望して国際証券(現・三菱UFJモルガン・スタンレー証券)への転職を決めたんです。証券を選んだのは、私自身も株式投資についてよく知りたいという気持ちがあったからです。また、大手の証券会社は英語のできる優秀な男性がたくさんいて、女性は戦力として見られていないと感じました。

——早稲田大学卒業後、就職先は外資系のケミカルバンク(現・JPMorgan・チェース銀行)を選びました。

岡島 最初はアディダスとかプーマとか、サッカー関係の企業を志望していましたが、チームへの商品納入等の仕事もあるので日曜日が休みじゃないんですね。当時、日本企業では土曜日も半日仕事がありました。私は、土日はサッカーの練習や試合がしたい。それができる就職

先として外資系の銀行にしたんです。

配属先はバックオフィスでのオペレーション。L/C(信用状)

(注)のアドバイスなどを担当していました。ただ、銀行で一番大きな仕事といえはお金を貸す仕事です。お客様は日本の生命保険会社や商社が中心で、カウンターパートは皆、日本人の男性。女性がそういう場へ営業に行くことはほとんどありません。男女雇用機会均等法ができてす



メリルリンチに勤務していた頃(本人提供)



おかじま・さくこ ● 1958年東京都生まれ。中学生からサッカーを始め、日本初の女子クラブチーム・FC ジンナンで選手としてプレー。77年のアジア女子選手権（現・AFC女子アジアカップ）への参加を機に代表チーム作りに奔走し、79年には日本女子サッカー連盟初代理事となる。83年に早稲田大学商学部を卒業。外資系金融機関であるケミカルバンク（現・JPモルガン・チェース銀行）東京支店に就職。同年に日本女子代表チームの選手として広州女子国際大会に登録。84年以降は日本女子サッカー連盟の事務局長、代表チームの主務としても活動。88年に営業職を希望して国際証券（現・三菱UFJモルガン・スタンレー証券）に転職。翌年に海外へ転勤となったことを機に現役選手を引退。その後、アメリカに移住し、リッグスバンクやメリルリンチ（現・バンク・オブ・アメリカ）といった大手金融企業を渡り歩き、国際金融の現場で活躍した。2020年7月に日本女子プロサッカーリーグの初代チェア（理事長）に就任し、「WEリーグ」を創設。22年9月、任期満了をもって退任。

女性にも活躍の場を与えてくれる準大手の国際証券で頑張ろうと考えたんです。

私は国際証券で初の総合職中途採用でした。まず債券のトレーディングルーム、それから株式のトレーディングルームで仕事をしました。その頃からサッカーより仕事が面白くなってきて……もちろん、プレーは続けていましたが、練習や試合より仕事を優先するときも出てきて、次第に仕事にのめり込んでいったんです。—— キャリアを形成していく道

は一つではない、壁に当たったら無理に越えようとせずに迂回することも考えてみようよ、岡島さんはかねて指摘されていたんじゃないです。

岡島 私自身、男性が圧倒的に多い金融業界の営業職に就こうとすると、すごくハンデがあったわけですね。ニューヨークで勉強してきても希望が通らなかつたり、転職しようとしても大手の会社には相手にされなかつたり、私はやりたいことのために迂回せざるをえなかつた

といえるかもしれません。

ただ、そうやって国際証券に入ってみたら、女性であることが大きなメリットになったんです。外国法人部の所属で、アメリカやヨーロッパのファンドマネジャーがお客様でしたから、その営業担当に男女は全然関係ない。むしろ、日本人で女性の私は珍しがられ、アポを取るまでに普通は一カ月待ちという忙しいお客様が次の日に会ってくださったりしました。そうしなければこつちのもので、私はアナリストのバックグラウンドがあるから良い銘柄を発掘できるし、英語で説明したり意見交換したりすることもできます。国際証券の営業が何年通っても注文を取れなかった大きな会社から、私は一週間で三〇万株とか五〇万株の注文をもらうことができた。六〇人いる営業のうち、トップセールスになったんです。

—— 八九年にサッカーを引退、九一年にはアメリカ人のご主人とメリーランド州のボルチモアに移住され、二〇一九年まで現地の複数の金融機関で勤務され

ました。環境を変えながらステツプアップされたところが凄いと
思います。

岡島 目の前に選択肢が二つあったときに、私は、どっちが得か、どっちが損かという目線では見なかったんですね。どっちが楽しそうか、どっちが好きかで選んできました。そうすると自分の選択に責任を持つことができるし、一生懸命になることもできます。一方で、得かもしれないけれども嫌なことは続かないと思うんです。

判断力を磨くために、本を読むことのほか、仕事をちゃんと身につけていくことも大事だと思えます。私の場合、企業を渡り歩いてきたように見えるかもしれないませんが、三八年間身を置いたのは金融の世界だけです。その中で営業を経験して強く感じたのは、お客様は「誰を通じて投資するか」を重視しているということなんです。アメリカに移住した後は、ファースト・ナショナル・バンクからリッグスバンクに移り、さらにメリルリンチ（現・バンク・

オブ・アメリカ)に移りましたが、お客様は私についてきてくださった。アメリカの富裕層の方々はいくつかの投資銀行に少しづつお金を預けるのではなく、一つ

のところに全財産を預けて資産運用してもらいます。だからこそ、私自身を信頼してもらわないといけません。私はメリルリンチ時代にCFP(Certified Financial Planner)の資格も取りました。お金の相談に乗る力をもっと鍛

ジェンダー平等の理念を推進する「WEリーグ」

——女子サッカーの選手として、また金融業界の営業職としても実績を残された後、女子プロサッカーリーグのチェアという新たなチャレンジをされました。岡島 日本女子サッカーへの愛です。あと、私以外に誰がやるんだと、そういう気概もあってお引き受けしました。サッカー協会の女子委員会には、初代チェアは元女子サッカー選手であってほしいという気持ちがあると聞き、ビジネスの経験もある

えて、お客様から「この人じゃない」と思っていただける存在になるうとしたのです。

——「自身のキャリア形成を振り返って、メッセージをいただけますか。」

岡島 女性の潜在力は貴重な宝です。人口減少が見込まれるわが国ではなおのこと、そう思います。女性が輝ける社会をつくることは国や企業にとって必ず力になるはずはです。

私でお役に立てるならと思ったのです。

でも、コロナ禍の最中にリーグを立ち上げるといのは本当に大変でした。日本初の女子のプロリーグをつくるわけですから、最初は手探りです。スタッフみんなど力を合わせて無我夢中で進めました。他の女子競技団体からは「女子サッカーがこけたら、日本ではもうプロリーグはできない」と言われましたが、一年目に全一一〇試合がで

きた。そこは一つの成果かなと思っています。

——「WEリーグ」という名称にどのようなメッセージを込めたのでしょうか。

岡島 WEはWomen Empowermentの頭文字です。サッカーは日本では男子のスポーツなんですね。現在でもサッカー協会の登録選手数は男子が九四%、女子は六%。数が圧倒的に少ないので女子選手は初めからジェンダーの壁に当たるわけです。例えば、同じクラブにプロとして所属していても、男子選手には素晴らしいクラブハウスが提供されるのに女子選手にはないとか、男子選手は天然芝のグラウンドで練習できるのに女子選手は人工芝だとか、そういう差が日常的にあります。

でも、女子選手たちはそれらをジェンダーの問題と認識していない。女子選手たちが子どもの頃に教わってきた指導者は大半が男性です。「男子ならもっと速く走れるのに」といった目で女子を見てしまう。そういう指導者の態度にさらされて大人になった女子選手たちは「男子のJリーグが

稼いだお金で私たちもサッカーができてい」などと考えたり、自分たちがそれほど重要な存在ではないと思ったりしがちです。WEリーグではジェンダー平等・女性活躍を理念に掲げました。それを前に出していくことで、まずは女子選手たちをエンパワメント(力づけ)してあげたいと私は考えたのです。

ただ、そのように理念先行でサッカー以外の部分にも力を割いたことに対しては、短期的な成果を上げるのは難しいとも感じました。クラブにとっては試合で勝つこと、試合ごとに観客を動員することが大切で、ジェンダー平等のような理念を浸透させるには時間がかかると思います。私は(二〇二二年九月末に)任期満了でチェアを退任しますが、WEリーグはジェンダー平等・女性活躍の理念を引き続き大切にしてもらいたいです。そして私も、引き続き私にできるサポートを続けたいと思っています。

——本日は、ありがとうございました。

(聞き手/情報サービス局長・上口洋司)



地域の底力——北海道阿寒郡鶴居村

先人の尽力を礎に 未来を開拓する 北海道鶴居村

いしずえ

移住者の増加による人口維持、
基幹産業である酪農の活性化、
そして自然を舞台にした観光の広がり。
北海道阿寒郡鶴居村では
長年にわたる尽力が道を切り拓き、
明るい未来へと続く可能性を生んでいる。

北海道鶴居村の景色を彩る主役は、村名の由来になったタンチョウ。繁殖、子育ての季節である春から夏にかけては湿原に暮らす、村内の散策中に偶然出会えることも。秋、冬は人里に移動し、その美しい姿で多くの観光客を魅了する。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一



長年にわたる保護により数が増えたタンチョウだが、近年は農業被害が生じており、給餌量の調整や生息地域の分散化といった対策が検討されている。



釧路湿原特別保護区域に指定されたキラコタン岬は、絶滅したと考えられていたタンチョウが、1920年代に発見されたエリアの一つ。蛇行するツルワシナイ川が絶景を生む。

未来への可能性を感じる 人口維持と酪農の活性化

北海道阿寒郡鶴居村は道東、釧路市に隣接する人口約二五〇〇人の自治体だ。一帯の営みは、一八八五年（明治十八）に釧路市から二七戸が移住して幕を開けた。大正時代には本州各地からの団体入植などにより六八〇戸まで増え、昭和に入り一九三七年の鶴居村誕生へと至る。

村名はこの地に生息し、一九五二年に国の特別天然記念物に指定された鶴「タンチョウ」に由来。地域には釧路湿原国立公園の一部が含まれ、タンチョウとともに美しい

い景観を目標で訪れる国内外の観光客を魅了してきた。

村の人口は一九五五年の約四八〇〇人をピークに急な右肩下がりが続いたが、三〇〇〇人を割った一九七〇年代後半からはおおよ



そ現状を維持している。二〇二〇年の国勢調査では、多くの自治体が人口減少となる中で、三五年ぶりに前回の調査を上回る結果になり注目された。

二〇一二年から現職を務める村



コロナ禍により中断を余儀なくされているものの、定期的な懇談会などを通して住民の声に耳を傾けてきた村長の大石正行氏。「今後は鶴居村に移住された方々にも、村を支える戦力になっていただきたい」と話す。

「一定住、移住は長い歳月をかけ、各種メディアやパンフレットを介して告知を重ねてきた取り組みです。おかげさまで今は、宅地や村営住宅をつくってもつくっても足りないという、とにかく住宅不足の状況になっています」

特徴的なのは、移住者の多くが



村の歴史やタンチョウの生態などにふれられる「ふるさと情報館『みなくる』」では、「鶴居簡易軌道」も展示している。鶴居簡易軌道は、入植者が増えた大正末期から昭和40年代にかけて活躍した。



(公財) 日本野鳥の会が運営する、タンチョウの給餌場「鶴居・伊藤タンチョウサクチュアリ」。

多くの移住者が暮らす村営の宅地分譲地「下幌呂 夢の杜団地」はゆとりのあるつくりで、敷地内には遊歩道や公園が設けられている。



二〇〇四〇代の若い世代であること。移住や住居の建築などに向けた多様な支援に加え、一八歳までの医療費や妊娠健康診査費が無料であること、出産への支援、学校給食無償といった手厚い各種福祉政策が背中を押しているものと推測

される。自然豊かな鶴居村に住み釧路市内で働く、ベッドタウンとしても需要は高い。道内の自治体の中では比較的温暖で、積雪量は平均三〇センチメートル程度という気候も幸いしているだろう。

「移住者の増加や人口の維持は、もともと住む村民の皆さんにとって、村の魅力や将来への可能性の高まりを感じる効果をもたらしていると思います」大石氏はうれしそうに、そう語っていた。

その村の経済基盤を支えるのが、人口の四割近くが携わる酪農。こちららもまた、近年になり生産量が増加している。

「牛乳の生産調整などにより、酪農経営はたびたび厳しい状況に置かれてきました。しかしながら経営の大規模化や機械化、AIや搾



「牧草ロール」が並ぶ様子は、観光客にとって印象深い景色に。



牧草地に立つ「一本桜」は、5月中旬が見頃。その景色を待ち望み、遠くから撮影に訪れる人は少なくない。

関連動画リンク(「一本桜」の風景動画)

<https://youtu.be/mvjfuiVjmec>



乳ロボットなど先進技術を取り入れた効率化等を村が支援したこと、就農者数や農家の戸数こそ減少したものの、牛の頭数とともに生産量は増加しています。二四時間体制を求められる労働環境はシフト制で改善され、若い世代が跡を継ぐ農家も見つけられます」

経営状態だけではなく、乳質も重視。村独自の取り組みとして質向上のための支援を続けた結果、乳質のコンテストでは幾度も日本一に輝いてきた。

村の日常の風景が 観光客の心を揺さぶる

タンチョウや釧路湿原国立公園が導く観光もまた、村の資源の一

つだ。二〇〇〇年開業の「HOTEL TAITO」の代表取締役であり、NPO法人「美しい村・鶴居村観光協会」の代表を務める和田正宏氏に、現状と背景についてお話を伺った。

HOTEL TAITOの歴史は和田氏の曾祖父が大正時代に富山県から入植し、林業にいそむ傍ら「和田旅館」を創業したこと



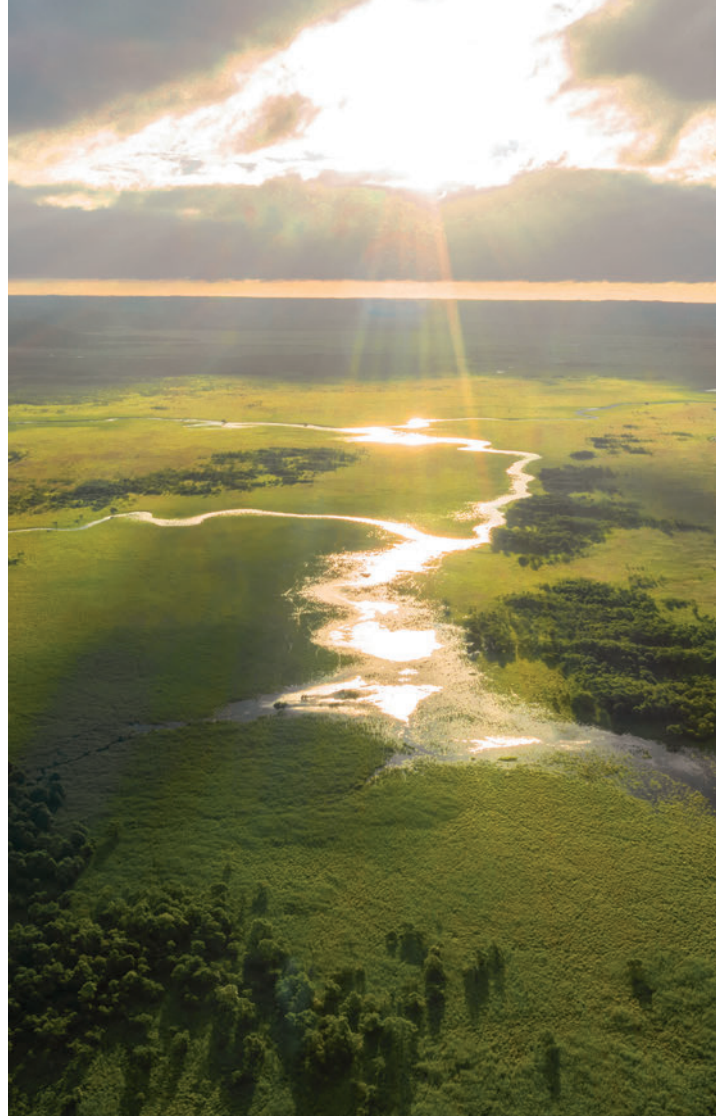
湿原を歩ける、全長3.1kmの木道コースが設けられた「温根内ビジターセンター」。日が暮れた後は、昼間とは異なる神秘的な世界に。



(注1) ラムサール条約／1971年イランのラムサールで開かれた国際会議にて採択された、湿地に関する条約。正式名称は、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」。



<https://youtu.be/FDfv8CD403I>
関連動画リンク（釧路湿原国立公園の風景動画）



鶴居村を含む4つの市町に広がる釧路湿原国立公園は、タンチョウだけではなく多種多様な動植物の宝庫。

に始まる。宿泊業を継いで四代目となる和田氏はタンチョウの写真家として広く知られ、ネイチャーガイドの活動も続けてきた。「昭和後期まで鶴居村を観光目的で訪れる人はなく、宿を利用するのは商業や開発の関係者、タンチョウ取材に訪れるメディアの方たちばかり。タンチョウと出会うために、一般の方々が観光に来るという意識は誰も持っていませんでした。湿原も同じです。谷地と呼ばれる農地としては利用価値がない存在だとみなされていました」

一九五一年には、北海道開発庁（現・国土交通省北海道局）が『釧

路泥炭地開発計画』を策定。泥炭地とはすなわち、湿地帯のことだ。その流れで湿原の開発が進められる中、まだ高校生だった和田氏は反対の声を上げたものの、ごく少数意見にすぎなかったそう。しかし、時代の変遷とともに社会の自然保護の意識が次第に高まり、釧路湿原は一九八〇年に日本初のラムサール条約（注1）登録湿地に、一九八七年には国立公園に指定される。独自の生態系が育まれてきた湿地帯の開発は規制がなされ、保護へと大きく方向転換した。

また、和田氏が撮影してきたタンチョウの作品が評価され、取材

依頼が増えたことがネイチャーガイドを始めるきっかけになったそう。そこにはタンチョウだけではなく、生息する環境をより深く知ってもらいたいとの思いがあったという。

「鶴がいる自然の景色は一般の方にとって感動をもたらす非日常です。ですから、観光資源になると考えていました。僕は学生時代に村外に出たこともあり客観的に故郷を見ることができたのが幸いでしたが、多くの住民にとって鶴がいる風景はごく当たり前。一九九〇年には村内の湿地に見学者用の遊歩道が設置されたものの、鶴の存在や自然が観光につながるという意識や発想は薄く、それを広く浸透させるのには苦労がありました」

かつて農業は観光事業と別物だと思われていたが、近年では農泊やチーズづくりなどの農業関連産業を体験する観光が広がり、やがて人々の思いに変化が生まれていく。

「鶴居村の住民は、鬱蒼とした森を開拓した先祖の記憶を代々受け継いできましたから、地元に対する愛情は深い。観光客に収穫したばかりの野菜を分けたり、搾乳し

た牛乳を飲ませたりという歓迎の意を自然に示す人が出てきて、それが互いの喜びにつながりました」

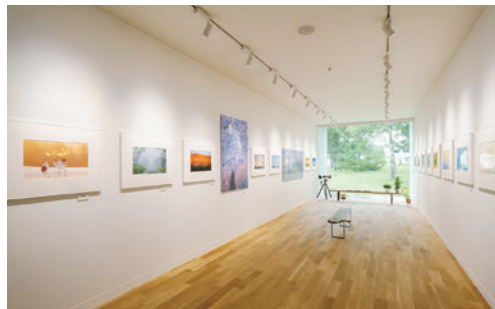
自然のすばらしさを体感する旅はやがてトレンドになり、コロナ禍にあっても需要は高まった。鶴居村観光協会では二〇二二年には「子どもと楽しむワーケーション」というテーマのもと、多彩な体験をまとめて「旅育」として打ち出した。

「樹齢一〇〇〇年を超える木々が残る原生林やあちらこちらで湧き出る伏流水など、鶴居村には磨けば光る原石がまだ残っています。牧草地だって、観光資源になる。それらをいかに磨き上げて発信するかが課題ですが、とりわけ村の若い世代は状況を理解していますので、今後はいい形で芽が出るのではないかと期待しています」



背丈約150cmのタンチョウは、翼を広げると幅2m以上になり、美しさとともに力強い存在感を放つ。

HOTEL TAITO 代表取締役の和田正宏氏。
ホテル敷地内には和田氏の作品を展示したギャラリーがあり、村の四季を背景としたタンチョウの姿を堪能できる。



上質な牛乳を生かした 特産品のチーズづくり

鶴居村の特産品で、観光客にも人気の商品が、鶴居村振興公社「酪楽館」のチーズだ。二〇〇二年にオープンした酪楽館はもともと、チーズやアイスクリーム、ソーセイジなどの加工体験施設だったが、二〇〇七年からチーズの製造を開



ホテルの一角にはサイクルステーション「BICYCLE SQUARE」が併設され、和田氏の息子の和田貴義氏がサイクリングツアーを推し進める。

始。国内屈指のチーズコンテストにおいて、二〇〇七年の最優秀賞をはじめ六大会連続で各種賞を受賞した実力を誇る。

現在、技師長としてチーズの製造を率いる小山田愛氏は、二〇一〇年に就職。故郷の青森県を離れて北海道内の畜産大学に進学し、友人から紹介されたのをきっかけに酪楽館の一員となった。

「私が働きはじめた頃、酪楽館の製品は既に高い評価を得ていましたから、先輩技師の技術を受け継ぐ思いでここまで来ました。意識しているのは毎日の丁寧な仕込みと、熟成期間をきちんと見守ること。乳質の高い、地元の牛乳の良さを生かせるように努めています」

酪楽館のチーズは今

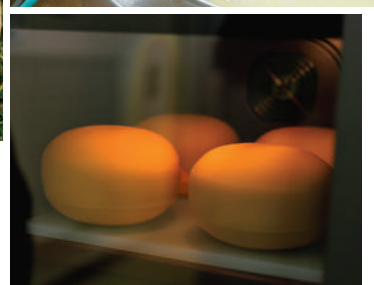
や贈答品やふるさと納税の返礼品にも活用される村の顔に。物産販売施設「鶴居たんちようプラザ」つるぼーの家」のほか村内はもちろん、釧路空港や新千歳空港などでも販売されている。生産量はスタート当初と比べて三倍に増え、熟成庫の拡張によりさらなる生産量増加が見込まれるという。

「目指しているのは、日本人の味覚に合った初めての方でも食べやすいチーズづくり。家族や友人が喜び、リピートしてくれるのがうれしいですね。これからも長く愛

される商品であればいいと願いながら、日々作業にいらしています」



酪楽館のチーズは63度の低温で殺菌した牛乳にレンネット(凝乳酵素)、乳酸菌を加えて攪拌した後、成形、熟成期間を経てつくられる。首都圏では、有楽町「北海道どさんこプラザ」で購入できる。



チーズづくりを担い、10年以上の経験を重ねた酪楽館技師長の小山田愛氏。温度や湿度、乳質など、その日の状況をふまえながら、工程には微調整が施されるという。

「山田氏の人柄と手がけるチーズの味わいは似ており、熟成期間に二カ月以上かける「プレミアムゴールドラベル」をはじめ、酪楽館の製品はやさしいおいしさで包まれていた。」



「丘の上のオーベルジュ ハートンツリー」オーナーの服部佐知子氏。鶴居村への移住から20年以上過ぎたそうだが、今も日々、朝日が照らす風景から頭上に広がる星空まで、鶴居村の美しい景色に感動を覚えると話す。

宿泊施設を備えた「鶴居どさんこ牧場」は、酪楽館同様に鶴居村振興公社が運営。1995年のオープン以来、釧路湿原を楽しめる乗馬体験が人気を博す。馬は在来馬の「北海道和種」。一般的に「道産子」の通称で知られている。



牛たちがのんびり牧草を食むという住民には見慣れた光景も、癒やしをもたらす観光資源に。

村の恵みを発信する 丘の上のレストラン

鶴居村のふくよかな牛乳のうまさを感じしたのは、一九九九年にオープンした小高い丘の上に立つレストラン「丘の上のオーベルジュ ハートンツリー」だ。オーナーの服部佐知子氏は鶴居村に隣接する阿寒町（現・釧路市）の出身で、大阪の調理師専門学校に通いヨ

ロッパ料理を学んだという。

「子どもの頃から北海道の新鮮な食材に慣れ親しんでいた自分にとっては、例えば野菜そのものが持つ力を大阪での生活では感じられなかったのが驚きでした」

その後、結婚、出産を機に、必要なものなんでも買えてしまう都会を離れて手作りの暮らしがしたい、健やかな生活を送りたいとの思いから北海道へのUターンを決意。現在の場所を決めたのは、縁あって訪れた際に美しい眺めに魅了されたことだ。

自宅とともにレストランを建築して開業の後、宿泊施設、バーベキューハウスなどを増築。ホームステイ、チーズづくりなどの体験プログラム、タンチョウ観察や湿原散策のガイドツアー、ガーデンウエディングにも対応するなど展開は幅広く、リピーターも多い。二〇二二年八月からは、あらたに設けられたチーズ工房での本格的なチーズの製造、販売も開始。夫の服部政人氏が観光協会の事務局で勤めて

おり、鶴居村の観光をそれぞれの立場で支えている。

地元の牛乳は、搾りたてを味わうだけではなく、すべての料理に使うのが開業時からの基本姿勢だ。

「開業前に鶴居村で酪農ヘルパー（注2）として働いていた際、餌の配合や飼育方法をそれぞれの酪農家さんたちが一生懸命に工夫されている状況と激務を目の当たりにし、その努力を伝えたい、鶴居村の酪農の応援団でありたいと願ってききました」

地元食材や無添加の自家製にこだわった健やかな料理のおいしさはもちろん、チーズをつくる際に出る水分（ホエー）も余すことなく使いオリジナルのキャラメルを



レストランをはじめ、丘の上に広がるハートンツリーの施設。テーブルやブランコなどが置かれている庭先で過ごす滞在客も多いという。

生み出すなど、環境を意識した姿勢も広く支持されている。

ハートンツリーにはコロナ禍でも癒やしを求める人の来訪が絶えないが、実は服部氏が移住を決めた当初、ここは水や電気が引かれていない牧草地だった。今でこそ「先見の明があった」と言われるが、開業時には周囲の反対を受けたと服部氏は振り返る。

「麓ふもとの川からポンプで水をくみ上げるなど、生活の基盤づくりは地元の知人の力を借り、その方が大工だったこともあってストロブやドアもつくってもらいました。彼が特別だったわけではなく、鶴居村の年配の方たちは、入植者が木を切り、根を取りのぞき開墾かいこんして

（注2）酪農ヘルパー／酪農家が休む際に酪農家に代わって、搾乳や餌やりなどの作業を行う仕事に従事する人。



ホエーでつくるキャラメルを口にすると、やさしい甘味に魅了される。



地元産「阿寒ポーク」を使うポークシチュー。料理には自家製のパンも添えられる。

先人たちの苦勞と努力を 先々へと受け継ぐ

きた様子を見たり手伝ったりした経験があるせいか、なんでもできると。牛舎や機械が壊れたら、自分で直すのが当たり前。自然の恵みを大切にしてみを土に戻す、今で言えばエコな暮らしも、ここまでは普通なんです」

ゼロからのチャレンジだったため、地元の人からは「平成の開拓者」と評された、と話す服部氏の笑顔が印象深かった。

村長の大石氏によれば、二〇二〇年以降はコロナ対策に追われたものの、飲食店への無利子の融資などさまざまな支援が功を奏し、閉鎖に追い込まれた事業所はないと



中央にかかる音羽橋周辺は冬場、タンチョウのねぐらになり、朝霧かかる早朝には幻想的な光景が見られる。

か。とはいえ、「たんちよう釧路空港」と村を直接結ぶ公共の交通手段がないなど、現状は課題も少なくない。生活圏でもある釧路をはじめ、村外での消費率が高いのもその一つ。地域内での経済循環を活性化させるため、官民が連携した「株式会社むらづくり鶴居」が設立され、ふるさと納税の支援や公共施設の運営、移住や空き家対策などに対してこ入れがなされるといふ。

移住の増加については先人たちの努力が実を結んだものだ、と大石氏が感慨深げに話していたのが印象深い。三〇年ほど前には既に水洗化率九五%以上を超えていた

下水道の整備や、二〇一一年に光ファイバー設備敷設を行うなど、重ねられてきた先駆的な取り組みが今の礎になっているという。

広い大地を彩る満天の星もまた、観光客にとっては忘れられない眺めとなる。



「鶴居村の一带ではもともと畑作を生活の礎としていましたが、昭和初期の冷害などにより大変な苦勞を強いられ、酪農に転換しました。第二次世界大戦後も、つめに火をともしような時代があったと聞いています。二度とそういう生活はしたくない、そういう地域にしてはならないという先人たちの強い思いが、時代に先駆けたより良い生活環境づくりにつながりました。村民の生活を豊かにするために懸命に励んだ、その思いを継いでいきたいですね」

現在、村内ではあらたなホテルの建設が進み、二〇二二年七月にはクラフトビールの工場が完成。さらなる宅地造成も検討されるなど、経済活性化への取り組みは広がっている。一方で鶴居村はNP

〇法人「日本で最も美しい村」連合(注3)にも加盟しており、このすばらしい自然の魅力も大切にしていきたいと大石氏は語る。

「釧路湿原国立公園をはじめとするこの自然環境を守り、後世に残していく役割が鶴居村にはあると思っています」

一時は、絶滅したと言われていたタンチョウは、今や道東で二〇〇〇羽近くを数える。環境に対する人々の意識は、この数十年で劇的に変化。さらにはコロナ禍を受けて常識は大きく変わり、社会では心身の癒やしが求められている。森林の開拓から始まった鶴居村の物語は、まだ序章にすぎないのかもしれない。未来へと続く道は、これから先も切り拓かれる。

(注3) NPO法人「日本で最も美しい村」連合/日本の農山漁村の景観・文化を守りつつ、最も美しい村としての自立を目指す活動をしている団体。2005年に7つの町村からスタートし、2022年9月現在は61地域が加盟(うち北海道は9地域)。

守破創
対談

ジャズピアニスト佐藤允彦氏は10代の頃からステージに立ち、長年にわたり国内外の演奏で高い評価を得てきた。作曲や編曲、ワークショップの開催、さらには執筆活動など、その活躍の場は実に多彩だ。青春時代から佐藤氏の音楽に魅了されてきた野口旭審議委員と、ジャズの自由で奥深い世界について語り合う。

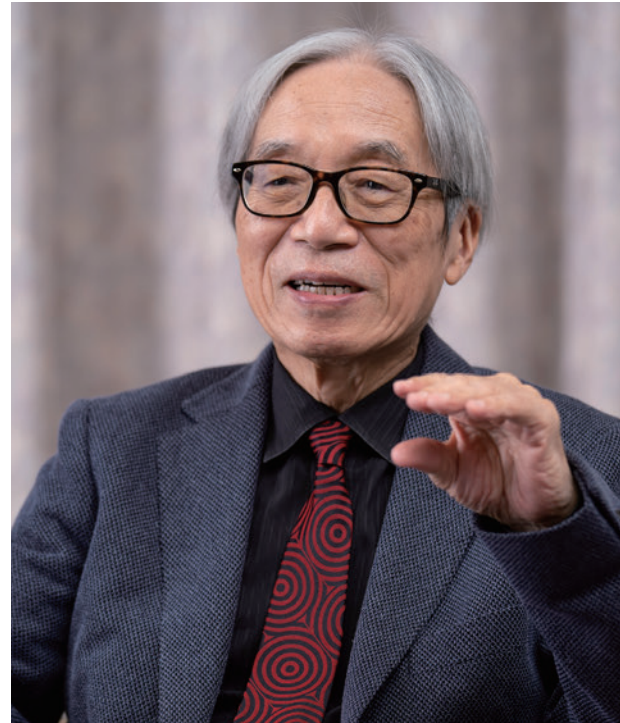


日本銀行政策委員会 審議委員

野口 旭

NOGUCHI Asahi

1958年北海道生まれ。82年東京大学経済学部卒業、88年東京大学大学院経済学研究科第2種博士課程単位取得退学、同年4月専修大学経済学部講師、91年専修大学経済学部助教授、97年専修大学経済学部教授、2003年イェール大学国際地域研究センター客員研究員、21年中央大学経済学博士号取得、同年4月より日本銀行政策委員会審議委員。



ジャズピアニスト

佐藤允彦

SATOH Masahiko

1941年東京都生まれ。慶應義塾大学卒業後、66年から68年にかけて米国バークリー音楽院に留学、作・編曲を学ぶ。帰国後、69年に初のリーダー・アルバム「パラジウム」でスイングジャーナル誌「日本ジャズ賞」受賞。97年に自己のプロデュース・レーベル「BAJ Records」を創設。1981年から2020年までミュージックカレッジ・メーザーハウスの音楽理論、作・編曲、ピアノ部門主幹講師。93年、「ジャンル、技量にかかわらず、誰でも参加できる即興演奏」を目指すワークショップ「Randooga」を開始、フリー・インプロヴィゼーションへの簡潔なアプローチ法を提唱している。

ジャズは互いの呼吸を読む コミュニケーションツール

縁に導かれながら進んだ
ジャズピアニストへの道

野口 個人的なことからで恐縮ですが、高校、大学とジャズ研究会に所属しており、その頃からFM放送などで佐藤さんの演奏を聴いていました。ライブにも伺ったことがあり、こうした場で改めてお目にかかることができて光栄です。お聞きしたいことは多々あるのですが、まずはジャズの道に進まれた経緯を教えてくださいませんか。

佐藤 一九五六年に、ジャズピアニストの穂吉敏子あきよしとしこさんがアメリカのバークリー音楽大学に日本人初の奨学生として留学したんです。その翌年、おやじの事業が立ち行かなくなりました。穂吉さんのことがあったからか、「それまで習っていたピアノで身を立てなさい、ジャズならアメリカにも行ける」とおふくろが言いだしました。そんなときに偶然、風呂の煙突掃除に来るおじさんのお客さんにジャズの先生がいるということで紹介されました。その先生に「実地で

勉強をしない」と連れて行かれたのが、銀座のクラブです。しばらくはなにも分らないまま毎日のようにステージ脇でジャズバンドの演奏を聴いていましたが、その後、新しいバンドが来て、ピアノの演奏者がいなくて困っている。「見学しているだけだ」と僕が言ったにもかかわらず、早とちりによって「来月から頼むね」と言われてしまいました。最初は何もできなかったのですが、歌謡曲やダンスミュージックは譜面を見ればある程度弾けるので、ごまかしながらこなしていた……それがきっかけです。

野口 いわば、オン・ザ・ジョブ・トレーニングですね。確か佐藤さんはまだ、高校生だった頃ですよ。大人ばかりの中にいて、大丈夫でしたか。

佐藤 気後れしていると、飯の食い上げになってしまいますからね。
野口 一八歳のときには、ジョージ川口さんが率いるバンド「ビッグ・フォア」の一員になられたとのことですが、その当時の日本の

ジャズの状況というのは、どのような感じだったのでしょうか。

佐藤 もの凄いブームでした。ビッグ・フォアのコンサートが有楽町の日生劇場で行われた際、銀座の方まで行列ができたほどでした。僕がビッグ・フォアに入ったのは中村八次さんをはじめオリジナルメンバーが辞めた後、ジャズに代わってロカビリー（注1）が台頭してきた時代です。

野口 その後、一九六六年には先ほどお話しされていた種吉敏子さんと同じバークリー音楽大学に留学されましたが、ご著書によれば積極的な心境ではなかったとか。

佐藤 元ビッグ・フォアのメンバーで先にバークリーで学んでいた渡辺貞夫さんがアメリカからよく手紙をくれました。その渡辺さんからの勧めがあり、奨学生の募集を知って、応募しました。ただ、留学が決まった後たまたま出掛けたコンサートで作曲家の武満徹さんの「ノヴェンバー・ステップス」という曲を聴いて衝撃を受けたんです。ちょうど現代音楽（注2）が

盛り上がっていて、無調音楽（注3）や十二音技法（注4）などが注目されていた頃だったのですが、僕は日本の音楽について何も知らないということに気がついた。世の中には凄い音楽がいっぱいあるのに、ジャズなんかやっついていいのかなという思いで渡米しましたね。

野口 実際、バークリーでの授業はいかがでしたか。

佐藤 僕はプロになってから既に何年かたっていたので、ほかの学生とは全然違うわけですよ。理論的なことはさておき、実践的なことや実質的なところは分かっていた。ですから最初の頃は授業が退屈で、ヨーロップの現代音楽などの本を図書室で片っ端から読んでいました。実際、そこから得た知識の方が多かったですね。

野口 結果的には、ご自身の音楽を突き詰める時間になったのかもしれませんね。ジャズとは本来、融通無碍なものだと思っ

ていますか。もし定義があると思っればそれはなんだと思われ

ますか。
佐藤 インプロヴィゼーション（即興演奏）があり、ある程度のリズム的な要素が満たされているということでしょうか。ただ、ジャズは年代によってどんどん変貌し、あるスタイルがもてはやされてきたかと思うと、数年後にはまったく違うスタイルが出てくる。ですから、どの年代に出会ったかによって、その人のジャズに対する評価や見方は変わってきます。

そういう意味では逆に、旧ソ連に行ったときに興味深い体験をしました。規制が緩和され、ヨーロッパからいろいろな文化が一度

（注1）ロカビリー／ロックン・ロールとヒルビリー（カントリー音楽の別称）を合わせた言葉。
（注2）現代音楽／西洋クラシック音楽の流れに対して、ヨーロッパで二〇世紀に入って湧き起こってきた新たな潮流。調性音楽的な従来の音楽様式とは異なり、無調や不協和音を多用することが多い。
（注3）無調音楽／調性音楽が長調と短調に基づいて中心音と諸音間で秩序的な体系があるのに対し、これらの調性を欠いた音楽のこと。
（注4）十二音技法／オクターヴ内、一二の音を一つずつ均等に使用して作った音階（音列）を用いる作曲技法。



に入ってきた時代です。ジャズもそれに大きく影響されたわけですが、デイキシーランド・ジャズ（注5）からスウィング・ジャズ（注6）、訳の分からない前衛ジャズまでなんでもありと、皆、好きなように演奏していました。僕らが持っていたような時代感覚は、まったくないスタイルでした。

予想外の結果につながる フリー・インプロヴィゼイション

野口 何かの拍子で独自の進化を遂げ、それがまたほかのものに影響して変化していくのもジャズの特徴なのでしょうね。そもそもはアフリカ起源の音楽と西洋音楽がアメリカで融合して生まれたジャズですが、現在はヨーロッパやアジアを含めて、世界に広く浸透している印象があります。日本人をはじめアメリカ人以外の演奏者がジャズに関わることに、なにか意味があると思われませんか。

佐藤 ジャズは結局のところ自己表現なわけで、みんなが知っているような平易なモチーフから始まり、自分の色を出していくことではないかと思っています。自分のフィルターを通して表現したものは、多かれ少なかれジャズ。ですから、国籍は関係ないですね。絵描きと同じで、どういう色を並べるか。それが和風の組み合わせになるか、あるいはアフリカのアートのような原色をいっばいたきつける感じになるのか、いろいろ

あつていいと思います。

また、ジャズは何人かが集まって演奏することも多いのですが、そのときに相手の音を聴いて面白と感じるかどうかは、互いのコミュニケーションが成立しているか否かによります。会話と同じで、誰かが自分の言いたいことばかり話し、ほかの人は白けているような状態の演奏では楽しくありません。そういう点においてジャズは、コミュニケーションツールでもありますね。

野口 例えばコードであつたり、リズムであつたり。互いに作用し合いながら、いかに一つのものをつくり上げていくのが、ジャズの醍醐味だいごみですね。佐藤さんが長年取り組まれているフリー・インプロヴィゼイションのワークシヨップで、集団即興演奏の手法を学ぶ「Rantoga」ランドゥーガもまた、ジャズがコミュニケーションツールであることを表しているように思えます。

佐藤 一九九〇年のスタート当初は、日本のメロディーをいろいろな国のミュージシャンに弾かせたり、日本のミュージシャンだけで

世界中のメロディーを料理したり。そんなことをやっているうちに、普通の人が集まって何かやったらどうなるかという発想に至り、結局はそれが一番長続きしています。楽器ができなくても、参加できます。何でもいいんです。

野口 楽器ができない人は、例えば打楽器をたたくとかでしょうか。

佐藤 打楽器でもいいし、手拍子だけでもいい。大切なのは、いかに互いのリズムの波動を合わせられるか、その中でどうやって遊べるのかということ。時々、極めて面白い感性の人が出てきます。

野口 お祭りのときに多くの人が輪をつくり、歌ったり手拍子をしたりする感覚でしょうか。

佐藤 その輪の中で誰かがとっぴなことを始めたら、どう受け入れていこうかという感じですね。

野口 ご著書を拝読した際、官僚等に対してフリー・インプロヴィゼイションの体験を勧めていらしたのが印象的でした。

佐藤 それはまあ冗談ですが、日本でそうした立場にある人の多くは、柔軟な動きが苦手なように見

えます。フリー・インプロヴィゼイションに馴染んでいれば少しは違うのではないかと考えます。

野口 確かに、「アドリブ力」というのは、公のコミュニケーションでもとても重要です。

佐藤 フリー・インプロヴィゼイションは、どこへ行っても、たとえ言葉が通じない国の人でも、何が出来る、生まれる魅力があります。ヨーロッパをはじめ海外では、フリー・インプロヴィゼイションだけで成立しているジャズフェスティバルが多く、相手のタイム感(注7)と呼吸を読んで、そうか、そう来るのね、じゃ、こう行くか……というやり取りができると、既成の音楽にはない面白さが出てきます。加えて海外ではそういう自由な催しを評価する層が厚いですし、国による財政的なバックアップが整っていたりします。

リアルなやり取りでこそ伝わることもある

野口 とりわけヨーロッパは、音楽に限らず芸術的な活動に関して国や政府が支えていこうという意

識が強いですよね。一方でアメリカはニューヨークをはじめジャズがある種の伝統文化のように位置付けられ、ビジネスとして成り立っています。とはいえコロナ禍以降、ライブが規制され、ミュージシャンにとっては非常に厳しい時期だったのではないのでしょうか。ライブ配信などオンラインによる試みも多く生まれましたが、佐藤さんはどう思われますか。

佐藤 ライブで大事なものは、生身の人間が目の前で演奏していること。配信、ましてやオンラインで演奏者がそれぞれ別々の場所にいるような状況では、何も生まれなれないと思います。実際にその場で人間が動くことで、ふっと何かが伝わる……。画面を通してしまったら、それは叶いません。最近になって久しぶりにライブに来てくれるお客さんは、「やっぱり、生はいいね」とおっしゃいますし、僕らも本当にそう感じています。

野口 ジャズの場合はCDで聴いても、ライブ演奏の方がスタジオでの演奏よりも生き生きとしているように思えます。演奏者だけで

はなく、観客もその空気を共有することが大切なのでしょうね。

ところで佐藤さんはポップスや歌謡曲、映画、CMといった世界でも作曲や編曲をなさっていますよね。クライアントのリクエストに応える必要がある仕事に取り組まれる際は、ステージでの自由な演奏とは異なる気構えなのでしょうか。

佐藤 相手の要求に従ったそぶりを見せながら、いかに自分のやりたいことを忍び込ませるか、どれだけ遊べるかというのは、かなり重要な要素ですね。実はとても前衛的な技法が含まれているのに、誰も気づかないこともあります。

野口 そういえば、昭和の大ヒット曲「こんにちば赤ちゃん」のサビがとても複雑なコード進行で、当時の歌謡曲としてはあり得ない斬新なスタイルだったと聞いたことがあります。作曲者である中村八六さんがジャズの世界にいらしたことが、作品に大きく影響したのではないかと思います。

最後になりますが、ジャズを楽しむ秘訣がありましたらご指南い

ただけますか。

佐藤 ジャズを聴く上で、知識はあまり必要ないと思います。自分で聴いてこれは面白いなと感じたら、それを飽きるまで聴いてくれればいい。「なぜ？」という疑問は、追求しないほうがより楽しめるのではないのでしょうか。

野口 自分の感性、感覚を大事にする。それこそが、ジャズの醍醐味なのかもしれませんね。本日は貴重なお話を、ありがとうございました。

(注5) ディキシーランド・ジャズ/二〇世紀初頭にアメリカ南部(ディキシーランド)のルイジアナ州ニューオーリンズで発展したジャズのスタイル。

(注6) スウィング・ジャズ/スウィングのリズムを特徴とするジャズで、ディキシーランド・ジャズの後に隆盛した。スウィングは娯楽性、大衆性をもつポピュラー音楽のリズムの一つ。一拍を二分割する音がある場合、最初の音符を長めにとり、次の音符を短くしてあたかも三分割の二対一に近く感じるように続けることで揺れ動く(スウィングする)リズムとなる。

(注7) タイム感/連続して聴こえてくる音に何か繰り返しがあることを感知し、それに沿って応答・再現できる感覚。

時代を読み、時代をリードする 日本銀行のCOE (Center of Excellence) としての役割

日本銀行創立一〇〇周年を機に創設された金融研究所は、二〇二二年、四〇周年を迎えました。研究所のWebサイトに四〇周年記念特集ページを設け、経済ファイナンス研究課、制度基盤研究課、歴史研究課の活動の歴史を振り返っています。若田部昌澄副総裁のビデオメッセージやOB対談、貨幣博物館の企画展ポスター、アーカイブから掘り起こした貴重な写真などが掲載されており、金融研究所の過去・現在・未来が一覧できる内容となっています。記念イベントの詳細と併せて、金融研究所の各課の活動や役割をご紹介します。

「基礎的研究は、樹木の『根』に相当する」前川総裁(当時)

金融研究所は、「金融経済の理論、制度、歴史に関する基礎的研究の充実を図り、日本銀行の政策の適切な運営に役立つ」目的で一九八二年に設立され、本年四〇周年を迎えました。設立当時の前川春雄総裁は「基礎的研究は、樹木にたとえれば根に相当し、一見地味ではあっても、非常に重要」と述べています。

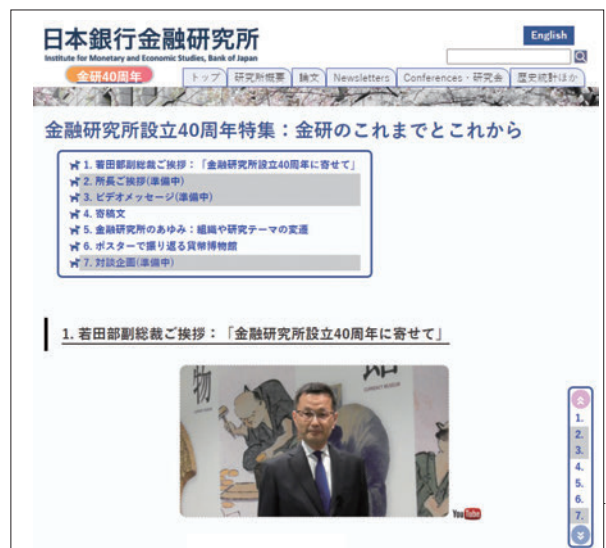
この言葉が示す通り、金融研究所の研究は中長期的な視座で行われています。また、世界のほとんどの中央銀行が研究

対象を経済・ファイナンスに絞っているのに対し、法制度、会計制度や情報技術、歴史なども幅広く研究しているのも特徴の一つです。

今回は、四〇周年を機に「その歴史と資産の棚卸しを行い、活動やあり方について次の一〇年を展望する」ことを主目的として、四〇周年企画事務局を組織し、Web企画を準備してきました。具体的には、画像で振り返る「金融研究所のあゆみ」や、年代別にまとめた研究テーマと時代背景、金融研究所の副島豊所長によるOBインタビュー対談などを展開します。

時代ごとに最先端の研究テーマで経済・ファイナンス研究を深める

三課のうち、経済、金融を真正面から研究するのは経済ファイナンス研究課です。経済分野では、この四〇年の間にさまざまな事象（例えば金融市場の自由化やその後の発展、バブル崩壊やリーマンショック）の背景や金融政策対応のあり方などの研究を進めてきました。ファイナンス分野では、金融工学やデータサイエンス手法など、時代ごとに中央銀行業務に必要と考えられる最先端の分野を中心に研究を行ってきました。



設立40周年記念特設Webページでは、ビデオメッセージ、寄稿文、歴史的に貴重な画像資料、年表などのさまざまなコンテンツを掲載中です。

年代別にまとめた研究テーマや活動取り組みの年表からは、時代背景やそれに応じた問題意識が浮き彫りに。

金融の分野	経済ファイナンス研究課	制度基盤研究課	歴史研究課
1980年代	<p>経済ファイナンス研究課のトピック</p> <ul style="list-style-type: none"> 1981年 金融研究科設立（研究員） <p>経済研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 1981年 金融研究科「国債に関する論議の経緯的検討」を掲載（初年度の特別研究室時代） 1983年 編「国債市場のファイナンス」を掲載 【研究テーマ】国債市場のファイナンスに関する研究の進展 	<p>制度基盤研究課のトピック</p> <ul style="list-style-type: none"> 1981年 金融研究科設立（研究員） <p>制度研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 1986年 制度研究科「オペレーション・システムと金融市場の発展」を掲載 <p>【研究テーマ】オペレーション・システムと金融市場の発展に関する研究の進展</p>	<p>歴史研究課のトピック</p> <ul style="list-style-type: none"> 1981年 金融研究科設立（研究員、二階堂孝三准教授が初年度） <p>アーカイブ</p> <ul style="list-style-type: none"> 【レポート】 1982年 編「国債市場の発展」として「国債市場」の発展と並に研究者も国債市場の発展（2022年5月まで） <p>金融研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 【研究テーマ】国債市場の発展、市場上の状況 <p>資料情報</p> <ul style="list-style-type: none"> 【レポート】 1981年 編「国債市場の発展」に関する研究の進展 1982年 編「国債市場の発展」に関する研究の進展 1983年 編「国債市場の発展」に関する研究の進展
1990年代	<p>経済ファイナンス研究課のトピック</p> <ul style="list-style-type: none"> 1991年 Financial Engineeringチーム立ち上げ <p>【研究テーマ】金融市場の発展と国債市場の発展に関する研究の進展</p> <p>ファイナンス研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 【レポート】 1991年 編「国債市場の発展」に関するワークショップ「金利リスク・運用リスクの統合的考察」を掲載 【研究テーマ】金利リスク・運用リスクに関する研究の進展 	<p>制度基盤研究課のトピック</p> <ul style="list-style-type: none"> 1991年 金融研究科設立（研究員） <p>制度研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 【研究テーマ】 1991年 編「国債市場の発展」に関するワークショップ「金利リスク・運用リスクの統合的考察」を掲載 【研究テーマ】金利リスク・運用リスクに関する研究の進展 <p>情報研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 【レポート】 1991年 編「国債市場の発展」に関するワークショップ「金利リスク・運用リスクの統合的考察」を掲載 【研究テーマ】金利リスク・運用リスクに関する研究の進展 	<p>歴史研究課のトピック</p> <ul style="list-style-type: none"> 1991年 金融研究科設立（研究員、二階堂孝三准教授が初年度） <p>アーカイブ</p> <ul style="list-style-type: none"> 【レポート】 1991年 編「国債市場の発展」に関する研究の進展 1992年 編「国債市場の発展」に関する研究の進展 1993年 編「国債市場の発展」に関する研究の進展 <p>金融研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 【研究テーマ】金利市場に関する研究の進展
2000年代	<p>経済ファイナンス研究課のトピック</p> <ul style="list-style-type: none"> 2000年 金融研究科設立（研究員） <p>経済研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 2000年 金融研究科「国債市場の発展」に関するワークショップ「金利リスク・運用リスクの統合的考察」を掲載 【研究テーマ】金利リスク・運用リスクに関する研究の進展 	<p>制度基盤研究課のトピック</p> <ul style="list-style-type: none"> 2000年 金融研究科設立（研究員） <p>制度研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 2000年 金融研究科「国債市場の発展」に関するワークショップ「金利リスク・運用リスクの統合的考察」を掲載 【研究テーマ】金利リスク・運用リスクに関する研究の進展 <p>情報研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 2000年 金融研究科「国債市場の発展」に関するワークショップ「金利リスク・運用リスクの統合的考察」を掲載 【研究テーマ】金利リスク・運用リスクに関する研究の進展 	<p>歴史研究課のトピック</p> <ul style="list-style-type: none"> 2000年 金融研究科設立（研究員、二階堂孝三准教授が初年度） <p>アーカイブ</p> <ul style="list-style-type: none"> 2000年 編「国債市場の発展」に関する研究の進展 2001年 編「国債市場の発展」に関する研究の進展 2002年 編「国債市場の発展」に関する研究の進展 <p>金融研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 2000年 金融研究科「国債市場の発展」に関するワークショップ「金利リスク・運用リスクの統合的考察」を掲載 【研究テーマ】金利リスク・運用リスクに関する研究の進展

同課では国際コンフランスを年に一度主催しています。これは、世界の中央銀行関係者や著名な経済学者らを招いて開く大規模な会議です。特設ページでは過去二七回のメインテーマを紹介しており、その変遷について同課長の須藤直さんはこう語ります。

「数年単位で俯瞰してみると明らかなる潮流変化があります。例えばリーマンショックは金融システムの安定性の重要性についてのパラダイムシフトを引き起こしました。また、低成長・低インフレ下でのゼロ金利政策や非伝統的金融政策が日本だけではなくグローバル

に議論される契機となりました。今後はデジタル化が社会に及ぼす影響とビッグデータの活用が重要となりそうです」

金融インフラとしての制度基盤の研究

法制度、会計制度、情報技術は金融の重要なインフラです。制度基盤研究課では、この三つを研究対象としています。デジタル化による大きな社会変化が急速に進む中、これらの重要性は一段と高まっています。一九八六年、同課において始まった法律問題研究会では、最初にオブリゲーション・ネット（注1）の法律問題を取り上げました。清算機関やネットインクに関わる資金決済関連の法制度が整うはるか以前に、研究に着手していたわけです。このほか新しい金融商品の法的枠組みや時価評価・会計処理、国際的な会計基準のコンバージェンス（注2）、ガバナンス・開示制度の研究などに積極的に取り組んできました。

二〇〇五年には情報技術研究センター（CITEC）を設立し、暗号や電子マネーなど先端技術に関する研究と対外発信を強化しました。最近では、機械学習、量子コンピューター、ブロックチェーン、デジタルマネーなどを金融分野で活用していく際の課題や将来展望などを、外部の実務者や研究者とも議論しながら



副島所長(左)による岩下直行教授(右)へのインタビューでは、金融研究所での情報技術研究の歴史と展望について熟論が繰り広げられました。

探っています。記念イベントにおいては、同センターの歴史を語ってもらうため、初代センター長で現在は京都大学で教壇に立つ岩下直行教授へのインタビュー記事が公開されます。インタビューに同席した同センター企画役の田村裕子さんは、「二時間にも及ぶ熟論でした」と興奮気味に振り返ります。

「一九九〇年代に行った電子マネーの技術研究や、金融業務で用いられる暗号の安全性に関する研究の経緯について語っていただきました。中央銀行が中立的な立場から中長期的な視野で情報技術を研究し、その成果の発信を継続していくことは、わが国金融サービスが安全かつ安定的に発展していく上で重要であるという指摘は、自分の仕事の意義を再確認する機会になりました」

一方、法制度の分野では、金融研究所

(注1) 同日の決済日かつ同じ通貨で行う複数の取引に基づく債権・債務を、取引の都度、新たな債権・債務に置き換える決済方法。

(注2) 各国・地域によって異なる会計基準をより統一的なものに近づけようとする取り組み。

顧問で学習院大学大学院の神田秀樹教授から、四〇周年を祝う寄稿文を頂戴しています。そこでは、法制度研究に三〇年以上関わってこられたお立場から、「金融研究所には自由闊達な雰囲気があり、議論のレベルも高い。とくに法律問題研究会での研究内容は、実務的観点も踏まえつつ基礎研究と理論研究の両方が重視されており、金融研究所の活動の日本法学会研究への貢献は大きい」と述べていただいています。外部の学者や弁護士を招いて議論を重ねる法律問題研究会を長く受け持ってきた企画役補佐の山本慶子さんは、「議論が広く深い」と研究会の特性を語ります。

「民・商法や金融法、憲法など多分野の専門家が一堂に会して一つのテーマについて交わす議論は、ときに熱のこもったものとなります。直面する問題の解決だけでなく、将来のあるべき姿を先生方と探る作業は、大変やりがいにあふれています」

金融や貨幣の歴史を研究し、資料を保存・公開する

こうした経済や社会の変動を、歴史的な観点から研究するのが金融史研究グループ、アーカイブグループ、貨幣博物館グループの三グループを持つ歴史研究課です。金融史研究グループ長の畑瀬真理子さんは

歴史研究の意義をこう話します。

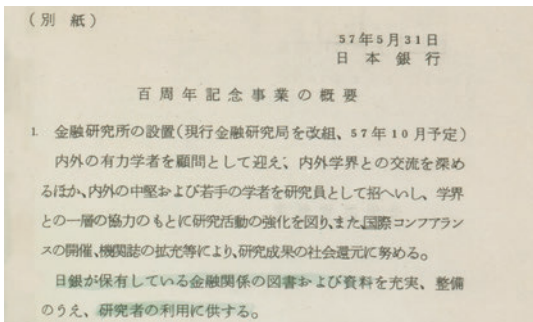
「研究すればするほど、金融や経済の仕組みの大事なところは変わっていないと感じます。他方で、金融に関する規制の有無など、今と昔では条件が違うこともあるので、似たような事例でも同じ結果になるとは思えないこともあります。今と昔の共通点や違いを明らかにできれば、そこから何が本質が見えてくると考えています」

歴史と向き合う同課は、金融研究所の四〇年を振り返るに当たり大きな役割を担いました。歴史的資料の収集・保存・公開を担当するアーカイブグループは、貴重な数多くの資料や写真を選び出しました。

「金融研究所の設立は日本銀行一〇〇



特設 Web ページでは、アーカイブ所蔵資料から選び出した、金融研究所設立に関する資料や過去のコンファランス開催時の写真などを掲載しています。デジタルアーカイブもぜひご覧ください。



1982年5月 創立百周年記念事業についての対外発表資料



1983年6月 金融研究所主催第1回国際コンファランスの様相



2019年 デジタルアーカイブを開設 (写真は、デジタルアーカイブ掲載の日本銀行本館の建築風景)

周年記念事業の一環でした。設立に関わる当時の資料も今回の公表物に含まれています。写真は特別なトピックのものだけでなく、職場風景など普段の様子が見えるものも選びました。PCの大きさが今と全く異なることなどは、やはり写真で見るとインパクトが大きいですね」と、資料選定に携わった企画役補佐の大貫摩里さんは振り返ります。

日本銀行金融研究所アーカイブは一九九九年に金融研究所の中に設置され、二〇一一年に公文書管理法に基づく「国立公文書館等」の指定を受けました。アーカイブには、約一〇万八〇〇〇冊という莫大な公文書が保存されています。この目録はアーカイブホームページに掲載され、行内外から年間一〇〇〇〇件以上

の利用請求が寄せられています。また、二〇一九年にはホームページ上で資料を公開するデジタルアーカイブを開設するなど、資料公開の推進や利用者サービスの向上に積極的に取り組んでいます。

貨幣博物館グループも、歴史資料の保存や公開に積極的に取り組んでいます。貨幣を研究する同グループでは、約三〇〇〇点の資料を日本銀行本店の「貨幣博物館」で常設展示しています。同館は、一九八五年に開館し、二〇一五年に展示コンセプトの見直しを含む大規模なリニューアルを行いました。二〇二〇年にオンライン上の「おうちミュージアム」を公開、今年には貨幣博物館Webサイトをリニューアルなど、サービスの枠を広げています。現在は経済を学ぶ大学生などの来館も多く見られます。

記念イベントでは、同館の過去の企画展のポスターを一覧で紹介しています。直近の展覧会としては、にちぎん一四〇周年企画展「水辺の風景と日本銀行」を二〇二二年秋に実施しました。

「創設時の所在地の永代橋と現在地をつなぐ日本橋川に注目し、周辺の金融機関が描かれた錦絵と日本銀行誕生までのあゆみを紹介しました。その図録は当館ホームページに掲載しています」と、主任学芸員で企画役補佐の関口かをりさんは話しています。

記念イベントのページ制作は学びを兼ねて、職員が行った

ところで、今回の記念イベントではデジタルマーケティングの学びも意識しました。Web媒体にふさわしい特集ページや動画の制作は職員が手作業で行っています。

「動画撮影ではカメラ、録音、照明などを分担し、カット割りなどを試行錯誤しながら撮りました。編集も、職員が一から学んで行いました。自分たちでどこまでできるかチャレンジする良い機会でしたし、今後プロに頼む場合でも、今回の経験をもとに発注内容を高度にしていけると思っています。また、論文だけが伝達媒体ではないことを強く意識させられました」

そう話すのは、四〇周年企画事務局で実務的な取りまとめを担った経済ファイナンス研究課企画役の平木一浩さんです。

さらに金融研究所では、四〇周年に合わせて独自に運営しているWebサイト全体もリニューアルしました。担当した同課総務企画グループ企画役補佐の沖野健一さんは「多くの方に触れていただけるように、デジタル面などUI/UX（注3）に気を配りました。同時に、金融研究所から公表された大量の論文の中から目的の論文にスムーズに辿り着けるように検索機能も強化しています」と話しています。

最後に、所員から聞かれた印象的なコメントを紹介します。

「決済方法が多様化した今、『そもそもマネーってなんだろう?』と根本が問われる状況になっています。明治期の金融システム誕生秘話を取り扱った貨幣博物館の最新の展覧会（前出）や今回の記念イベントは、それらについて自分なりに改めて考える良い機会になりました」（須藤さん）

「三〇年前は、暗号などの情報技術の研究を中央銀行が行うことに懐疑的な見方もあったはずですが、今になると、いかに先輩たちが感度高く対応されてきたかが分かります。われわれが果たしていくべき使命を改めて認識したところです」（田村さん）

「歴史研究を行う立場としては、振り返ることの重要性、ひいては、自分たちの日常的な業務を記録しておくことの重要性を改めて感じました。次の五〇周年は日本銀行の一五〇周年でもあるので、それも意識しながら、将来を見据えて活動をしていきます」（畑瀬さん）

このように、記念イベントは、企画の狙い通り、所員たちが研究テーマや意義を見つめ直し将来を展望する機会となったようです。

（肩書などは二〇二二年九月中旬時点の情報をもとに記載）

（注3）UIは「ユーザーインターフェース」の略で、ユーザーが見たり触れたりして接する部分のことを指す。

UXは「ユーザーエクスペリエンス」の略で、ユーザーがサイトや製品、サービスなどを通じて得られる体験や経験のこと。



日本銀行のレポートから

日本銀行は、1月、4月、7月、10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）を決定し、公表しています。また、2022年4月以降は、展望レポートの内容を、より幅広い読者に伝えるための取り組みとして、そのポイントをイラストとともに簡潔に整理した資料（ハイライト）を公表しています。本稿では、2022年10月の展望レポート（基本的見解は10月28日、背景説明を含む全文は10月31日公表）のハイライトをご紹介します。

*全文は、日本銀行ホームページに掲載されていますので、ご関心のある方は、ぜひそちらもご参照ください。

<https://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm/>



「経済・物価情勢の展望」（展望レポート・ハイライト）

— 2022年10月 —

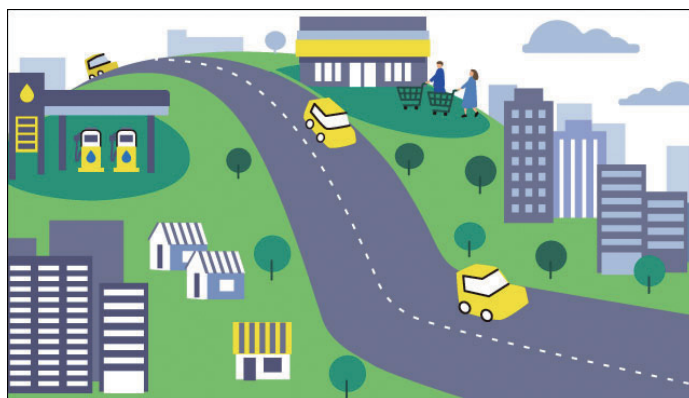


日本経済は回復に向かう

日本経済は、資源高や海外経済の減速により下押しされますが、感染症の消費への影響が和らぎ、部品調達難も解消に向かうなかで、回復していきます。

消費者物価の前年比は、本年末にかけてエネルギーや、食料品、耐久財などの価格上昇から上昇率を高めたあと、来年度半ばにかけて減速します。その後は、経済が改善し、賃金上昇率も高まるもとで、再び緩やかに上昇していきます。

物価は上昇率を高めたあと減速する





**海外の経済・物価動向など
不確実性は高く、市場動向に注意**

海外の経済・物価動向、ウクライナ情勢の展開や資源価格の動向、感染症など日本経済を巡るリスクは極めて高い状況です。また、金融・為替市場の動向と日本経済・物価への影響にも十分注意を払う必要があります。



強力な金融緩和を継続する

日本銀行は、2%の「物価安定の目標」の持続的・安定的な実現を目指していきます。また、感染症からの回復を支援するため、資金繰り支援と金融市場の安定に努めていきます。

政策委員の経済・物価見通し



(注) ●は実績値、○は見通しです。



日本銀行のレポートから

日本銀行は、金融システムの安定性を評価するとともに、安定確保に向けた課題について関係者とのコミュニケーションを深めることを目的として、金融システムレポートを年2回公表しています。本レポートの分析結果は、日本銀行の金融システムの安定確保のための施策立案や、考査・モニタリング等を通じた金融機関への指導・助言に活用しています。また、国際的な規制・監督・脆弱性評価に関する議論にも役立てています。金融政策運営面でも、マクロ的な金融システムの安定性評価を、中長期的な視点も含めた経済・物価動向のリスク評価を行ううえで重要な要素の一つとしています。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。 <https://www.boj.or.jp/research/brp/fsr/index.htm/>



「金融システムレポート」

二〇二二年十月

わが国の金融システムは、全体として安定性を維持していると評価できる。感染症拡大以降、経済活動が正常化に向かうなかでの供給制約とエネルギー・原材料価格の上昇、地政学的リスクの顕在化といった様々なストレスに晒されているにもかかわらず、わが国の金融機関は十分な自己資本と流動性を備えている。もっとも、各国中央銀行の利上げ継続とそれに伴う海外経済の減速懸念の広がりが加わるなど、ストレス局面は一段と長引く可能性がある。金融資本市場でも、神経質な展開が続いている。

より長期的な視点からみると、金融機関の基礎的収益力の低迷が続いた場合、損失吸収力の低下を通じて

金融仲介活動が停滞する可能性や、過度なリスクテイクを通じて金融システム面の脆弱性が高まる可能性がある。わが国金融システムの安定性を将来にわたって確保していく観点からは、こうした金融システムの停滞・過熱両方向のリスクを点検しつつ、潜在的な脆弱性に的確に対処する必要がある。

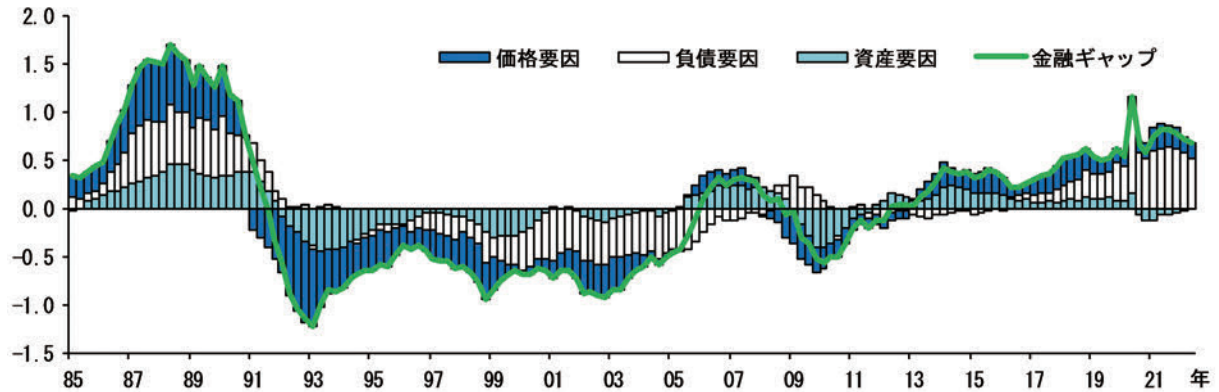
金融循環の現状

金融循環を表す金融ギャップは、円滑な金融仲介活動を背景に緩やかながらも拡大方向にあり、拡張局面は既に一〇年近くに及んでいる(図表1)。ただし、今回の拡張局面はこれまでのところ、民間債務の増

加(負債要因)が金融ギャップの拡大につながっているものの、実物投資の増加(資産要因)や資産価格の上昇(価格要因)による影響は限定的である。民間債務の累積と各種投資の活発化によるレバレッジの拡大が、資産価格の上昇を伴って進行するような、大きな金融不均衡は観察されない。

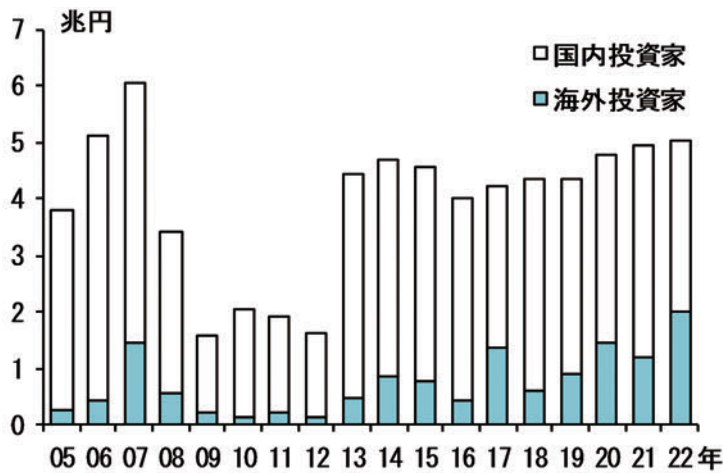
この一〇年における総与信の拡大の半分は、家計向け貸出と不動産業向け貸出の増加で説明できる。このうち大手行の不動産業向け貸出は、わが国不動産市場における投資採算が相対的に底堅さを維持するなか、海外投資家が高額取引を継続的に行っていることを背景に、不動産ファンド向けを中心に増加が続いて

図表 1 金融ギャップ



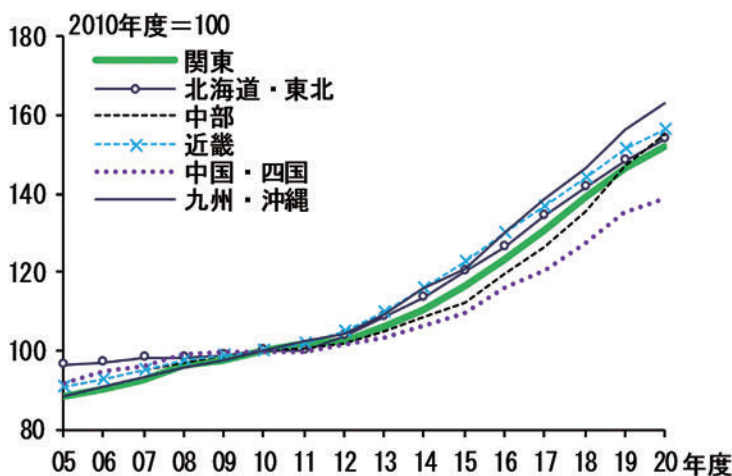
(注)「金融システムレポート(2022年10月号)全文」図表Ⅲ-3-4参照。
(資料)日本銀行

図表 2 内外投資家別の不動産取得額



(注)「金融システムレポート(2022年10月号)全文」図表Ⅲ-3-12参照。
(資料)日本不動産研究所

図表 3 不動産賃貸業の固定資産



(注)「金融システムレポート(2022年10月号)全文」図表Ⅲ-3-18参照。
(資料)CRD協会

いる(図表2)。また、地域金融機関の不動産業向け貸出は、不動産賃貸業の固定資産投資に比例して増加が続いている(図表3)。不動産市場では、オフィス賃料が低下し始めているほか、賃貸業の財務レバレッジが拡大している。海外投資家や賃貸業者の投資行動について、注意深くみていく必要がある。

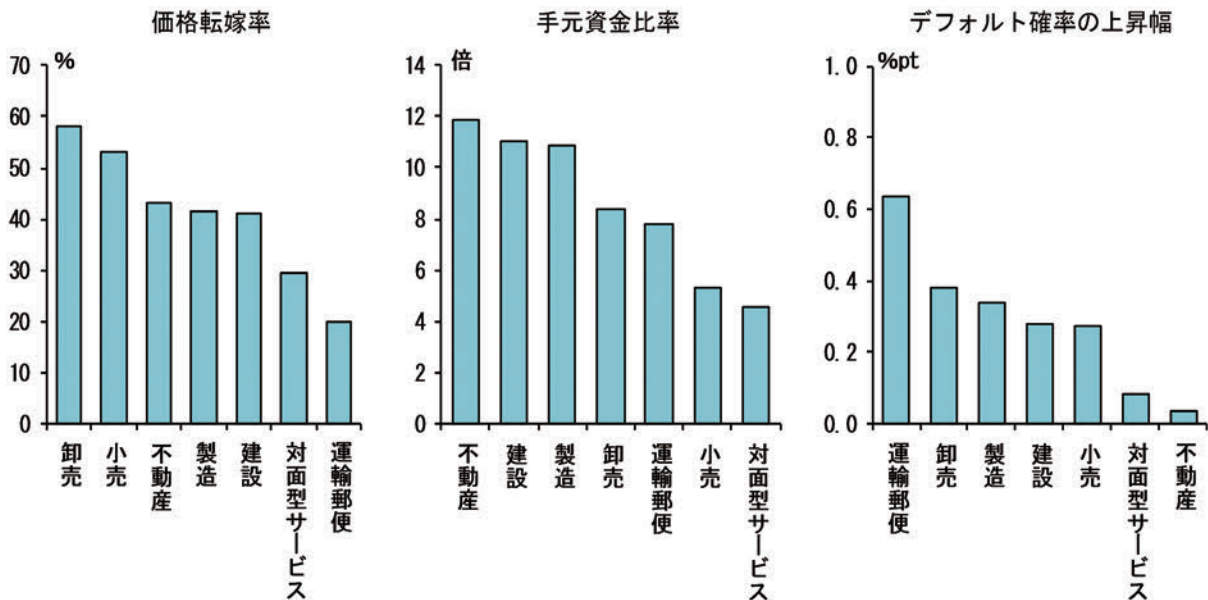
長引くストレス下の国内企業財務

ストレス局面が長引くもとでも、多くの企業は厚めの流動性バッファーを確保しており、このことが、デフォルトを歴史的な低水準に抑制する一因となっている。もっとも、輸入物価上昇に伴う原材料調達

コストの増分を販売価格へ転嫁することが難しい企業の中には、今後、デフォルト確率が相応に上昇し得る先がある。試算結果によると、①輸入依存度が高いために変動費が輸入物価に感応的である企業、②取引先との価格交渉力が低い企業、③感染症の影響を強く受けたために流動性バッファーが薄くなっている企業

は、デフォルト確率が高まりやすい(図表4)。実質無利子融資などのコロナ関連融資は、感染拡大下における企業の資金繰りを強力に支えてきた。同融資の多くは既に返済が始まっている。中小企業の財務をみると、感染拡大以降に純債務が増加した中小企業は、それ以外の企業に比べ、債務償還年数が長期化する方向にある一方、手元資金比率が低く、追加的なストレスへの耐性が相対的に弱い

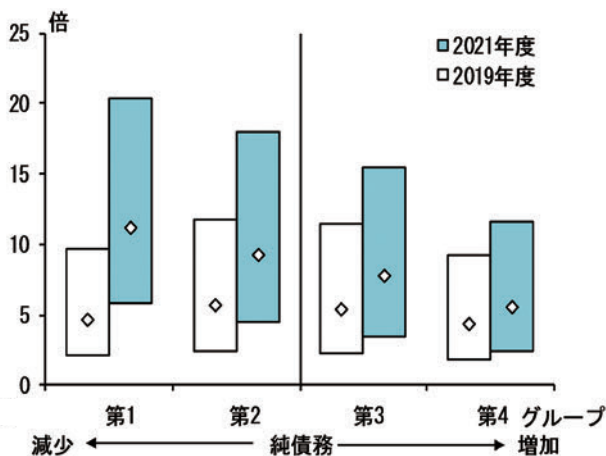
図表4 業種別のコスト耐性



(注) 「金融システムレポート (2022年10月号) 全文」 図表IV-1-13 参照。

(資料) CRD 協会、帝国データバンク

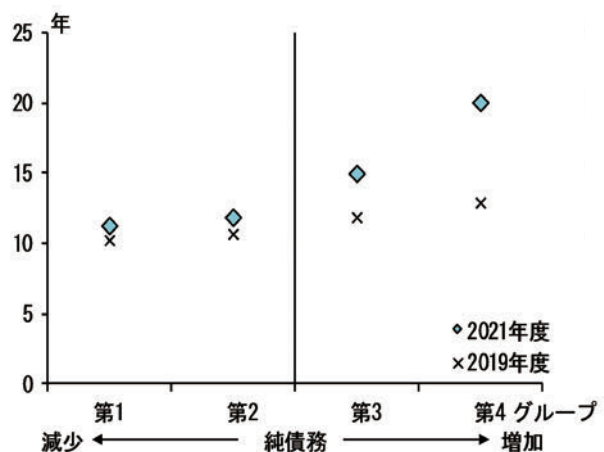
図表6 手元資金比率の分布



(注) グループごとに手元資金の対販管費 (月平均) 比率の中央値 (マーカー) と 25-75%点 (バンド) を表示。「金融システムレポート(2022年10月号) 全文」 図表IV-1-19 参照。

(資料) CRD 協会

図表5 債務償還年数



(注) グループごとに債務償還年数 (各年の借入金 / 2019年度の営業キャッシュフロー) の中央値を表示。「金融システムレポート (2022年10月号) 全文」 図表IV-1-16 参照。

(資料) CRD 協会

という特徴がある(図表5、6)。ストレス局面が長引くなか、金融機関には引き続き、企業の営業キャッシュフローの改善を支援していくことが期待される。

海外貸出の金利感応度

海外貸出は、高い投資適格比率が維持されている。もともと、海外金利が急速に上昇するなか、高レバレッジ企業を中心に信用力が悪化するリスクがある。海外貸出の業種別残高と格付け、企業財務の関係リスクマップとして可視化すると、投資適格比率が高い業種であっても、財務レバレッジが高く、利払い能力(ICR)が低い先が少なくない(図表7)。また、近年のレバレッジドローンの伸長が、海外貸出の非投資適格比率や高レバレッジ先比率を押し上げる方向に作用している。

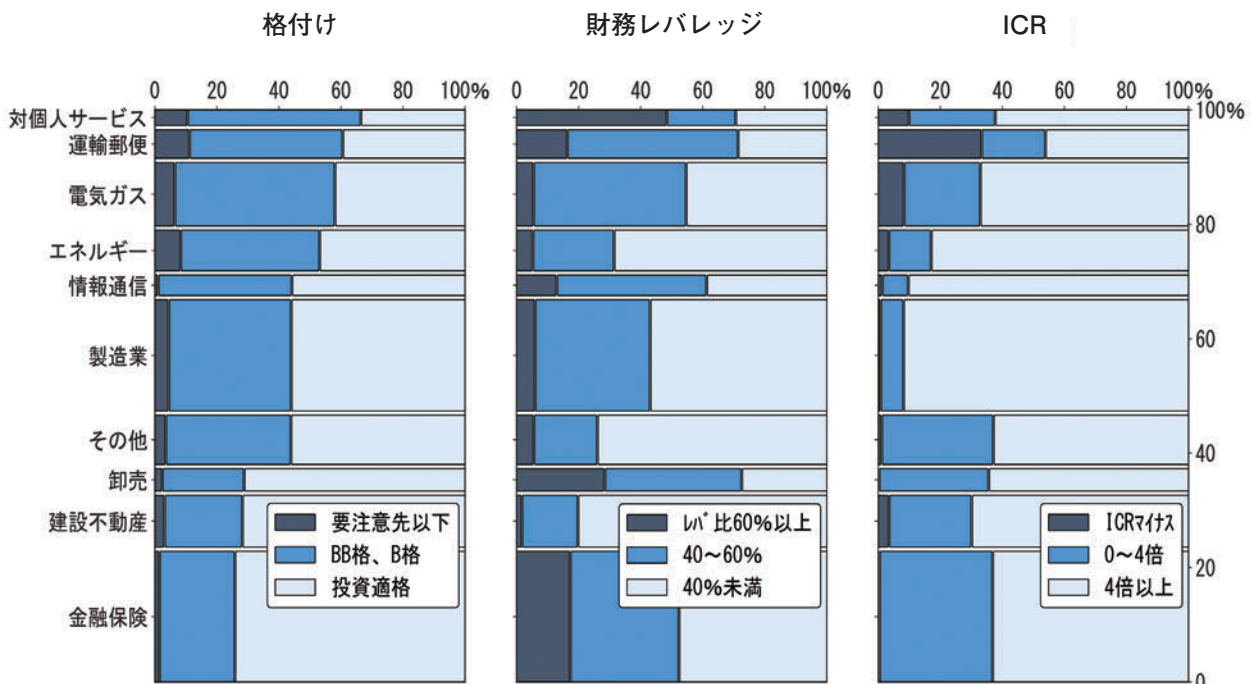
リスクマップが示すように、海外貸出ポートフォリオには高レバレッジ先が相応にあり、金利上昇に対する感応度は小さくない。資金調達コ

スト上昇に対する企業のデフォルト確率の試算結果からは、財務レバレッジが高くなるほど、デフォルト確率が加速度的に増幅される傾向が確認される(次ページ図表8)。また、企業の資金調達コスト上昇を想定したデフォルトカーブは、右肩上がりの傾斜がより急になるかたちで上方に移動する。高レバレッジ企業に対しては、よりきめ細かい信用リスク管理が必要な局面になっている。

海外金利上昇に対する金融機関のストレス耐性

このところ金融機関の有価証券ポートフォリオは評価損が拡大しており、先行きも、金利動向次第ではさらに拡大する可能性がある。外貨調達コストが上昇するなか、短期的に、外貨の運用利回り^{運用利回り}と調達利回りが逆転^{逆転}となる可能性もある。収益力強化を目的に外貨金利リスクテイクを進めてきた金融機関の中には、外貨利息配当金への収益依存度が高まっている先もあり、運用益の悪化

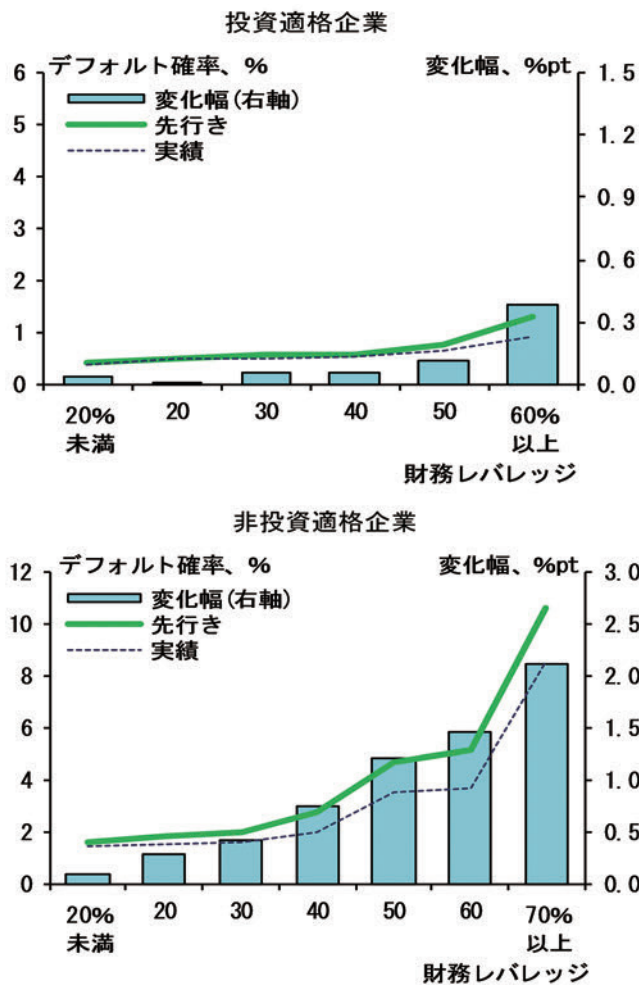
図表7 海外貸出のリスクマップ



(注) 縦軸は、3メガ行の業種別貸出残高比率。横軸は、左図から順に、格付け、財務レバレッジ(有利子負債/総資産)、ICR(EBITDA/利払い額)の構成比。2022年3月末時点。「金融システムレポート(2022年10月号)全文」図表IV-2-6参照。

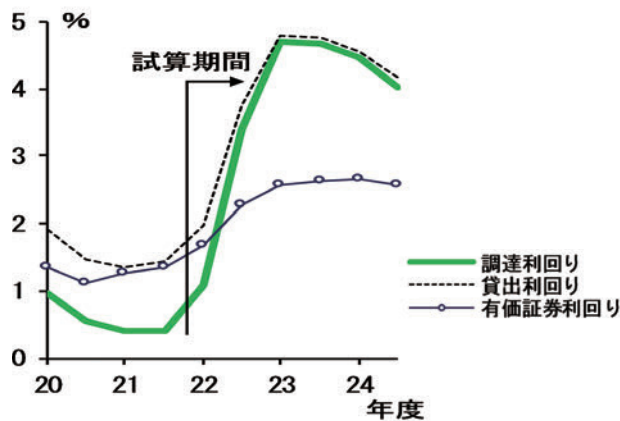
(資料) S&P Global Market Intelligence、日本銀行

図表8 デフォルトカーブ



(注)「先行き」は、資金調達コストの上昇を想定したデフォルト確率の推計値。「実績」は2022年6月時点のデフォルト確率。「変化幅」は、「先行き」のデフォルト確率の「実績」対比でみた上昇幅。「金融システムレポート(2022年10月号)全文」図表IV-2-12参照。
 (資料) Haver Analytics、Moody's、Refinitiv Eikon、S&P Global Market Intelligence、日本銀行

図表9 外貨運用・調達利回り



(注)「金融システムレポート(2022年10月号)全文」図表V-2-7参照。

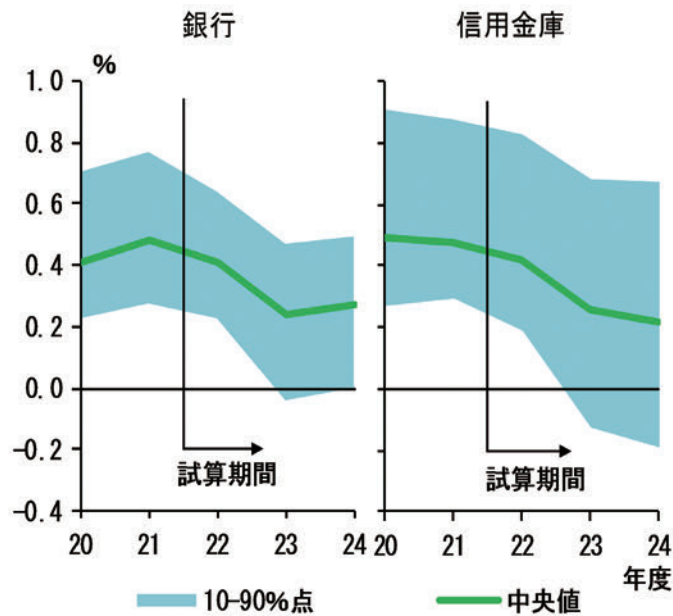
に伴う損失吸収力の低下には注意が必要になっている。
 マクロ・ストレステストの結果からは、海外市場金利が極端に逆イールド化するというストレステスト象に対して、金融機関は全体として、相応のストレス耐性を備えていることが確認される。ただし、海外市場金利の極端な逆イールド化を想定する

と、海外貸出利鞘は大きく縮小し、有価証券利鞘は逆鞘となる(図表9)。その場合、国際統一基準行は貸出関連と債券関連、国内基準行のうち銀行は債券関連と投資信託分配金、信用金庫は投資信託分配金の減益寄与がそれぞれ大きくなるが見込まれる(図表10)。また、収益バッファを表す損益分岐点信用コスト率は全

体として低下する(図表11)。金利上昇の初期段階では、債券評価損益が悪化することから、評価益による益出し余力が大きく低下し得る(図表10、12)。益出し余力の低下した金融機関は、追加的なリスクテイクが難しくなるため、収益力が低下しやすくなる。一部の金融機関において、金融仲介機能が低下するこ

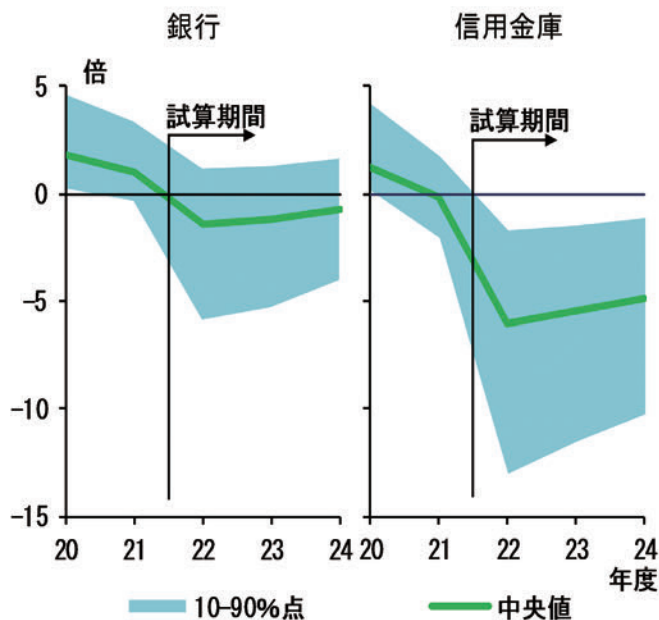
とも考えられる。
 日本銀行は、考査・モニタリング等を通じて、これらの潜在的な脆弱性に対する金融機関の取り組みを後押しするとともに、マクロブルーデンスの視点から、金融機関による多様なリスクテイクが金融システムに及ぼす影響について引き続き注視していく。

図表 11 損益分岐点信用コスト率の分布



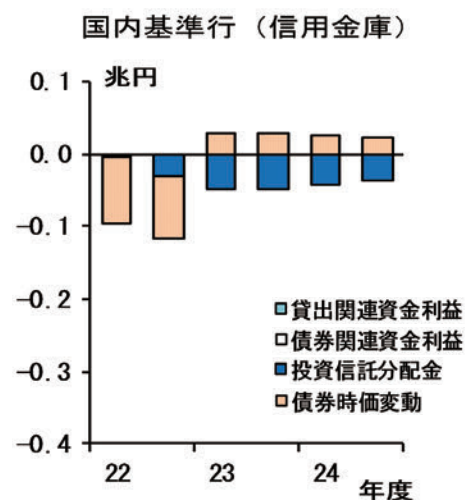
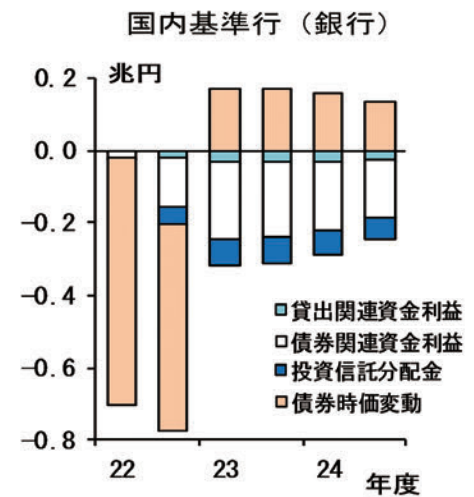
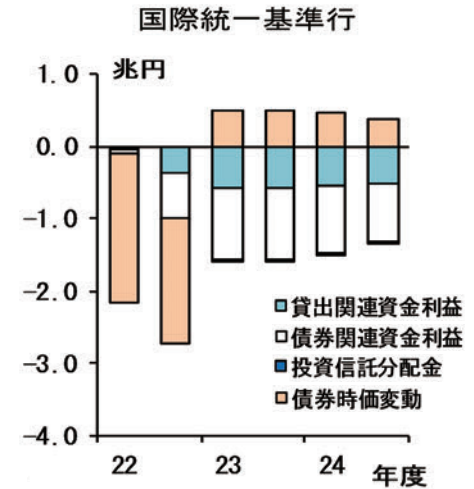
(注) 損益分岐点信用コスト率は、信用コストがコア業務純益と一致する信用コスト率。「金融システムレポート(2022年10月号 全文) 図表V-2-9 参照。

図表 12 益出し余力の分布



(注) 益出し余力=有価証券評価損益 / コア業務純益 (過去3年平均)。「金融システムレポート(2022年10月号 全文) 図表V-2-10 参照。

図表 10 海外金利上昇の影響



(注) 2022年1~3月以降のイールドカーブ変化の直接的影響のみ抽出して表示。「金融システムレポート(2022年10月号 全文) 図表V-2-8 参照。

旧小樽支店金融資料館

特別展「渋沢栄一にまつわるお金のはなし―新しいお札の肖像―」開催中!

二〇二三年二月二十一日(火)まで

▼二〇二四年度上期をめどに、新しい日本銀行券が発行されます。そのうち一万円券は四〇年ぶりに肖像が変わり福沢諭吉から渋沢栄一となります。

▼渋沢栄一(一八四〇〜一九三一年)は一橋家、大蔵省に仕官した後、第一国立銀行の頭取を長

く務め、お金の発行に深く携わりました。

▼一八六四年からは一橋家に仕え、財政を立て直すため領地を巡り、播磨の特産品である木綿に注目しました。良質の木綿を生産者から買い付け、大坂と江戸で直接販売することを考え、そのための機関として「産物会所」を開設しました。その上で、産物会所を発行元とし、地域で使える紙幣「御産物木綿預手形」を発行し、これを仲買に貸し付け、生産者からの木綿の買い取

りに使えるようにすることで取引の活性化を図りました。紙幣の発行に当たっては、地元や近隣の裕福な農商から出資を得て幕府発行の貨幣との引き換えが滞らないようにしました。彼らが会所の役職に就き、紙幣の信用も高まり、額面通りに流通したといえます。

▼その後、渋沢栄一はしばらく政府に仕官し、貨幣制度や国立銀行制度の設計に携わった後、政府を離れ、第一国立銀行の設立のため奔走します。三井組と

小野組に働きかけ、一八七三年に共同経営による第一国立銀行の開業にこぎつけました。設立当初は、三井八郎右衛門と小野善助の二人が頭取に就任し、

渋沢栄一が「総監督」として全体の業務を監督しましたが、一八七四年の小野組の破綻を機に一八七五年に渋沢栄一が頭取に就任しました。

▼本展示では、渋沢栄一が発行に関わった幕末から第一国立銀行までのそれぞれの紙幣と、第一国立銀行の風景が描かれた錦



裏

表

渋沢栄一が発行に携わった一橋領の紙幣
御産物木綿預手形 1865年

貨幣博物館 蔵



第一国立銀行紙幣 1873年発行
加筆修正された頭取「渋沢栄一」

貨幣博物館 蔵



渋沢栄一が頭取を務めた第一国立銀行の錦絵 貨幣博物館 蔵

絵をご紹介します。

皆さまのご来館をお待ちしております。

【入館料】 無料

【休館日】水曜日、年末年始（十二月二十九日～一月五日）

【開館時間】 午前十時～午後五時

※入館は午後四時半まで

※最新の情報は金融資料館ホームページをご覧ください。

【所在地】 北海道小樽市色内一
一―一―一六

【お問い合わせ先】

日本銀行旧小樽支店金融資料館

〇一三四―二二―二二―二二



①は観光案内所です

「ISOパネル（第六回）.. オンラインでの本人確認 （eKYC）―新たな国際 標準ISO5158の 概要と活用可能性―」を 開催（九月）

▼決済機構局では、九月十五日に標記パネルディスカッションをオンラインで開催しました。

▼金融サービスを提供する上で、本人確認は欠かすことができない業務です。近年では、スマートフォンなどのモバイル機器の普及が進み、利便性・効率性の観点からeKYCと呼ばれるオンラインでの本人確認を活用した金融取引も数多くみられています。こうした中、国際標準化機構（ISO）は、オンラインでの本人確認を行う上で適切な手法を選択できるように共通的な考え方を整理したISO 5158「モバイル金融サービス―顧客識別のガイドライン」の規格開発の作業を進めてきました。

▼当日は、この新しい標準規格

であるISO5158の仕様と、これに引用されているプライバシーや生体認証に関する国際標準を解説しました。その後、ISO5158の起案に携わった専門家の方々と、実際のeKYCを行うデモンストラーション動画も交えながら、①国際標準の起案の際に留意したこと、②ISO5158を日本で活用する上で必要なこと、③eKYC発展に向けた日本の課題、④国際的に調和のとれたルール形成の推進に向けた取り組み、についてパネルディスカッション形式で議論しました。

▼決済機構局は、金融サービス分野の国際標準化を検討する国際標準化機構（ISO）・金融サービス専門委員会（TC 68）の国内委員会事務局を務めています。金融サービス分野の標準化に関心のある方は、日本銀行ホームページに活動内容や取り組みを掲載していますので、ご覧ください。

金融広報中央委員会 創立七〇周年を記念して 対談を行いました

▼金融広報中央委員会（事務局：日本銀行情報サービス局、愛称：知るぽると）は二〇二二年四月十五日、創立七〇周年を迎えました。それを記念して、日本銀行の若田部昌澄副総裁（金融広報中央委員会委員）と俳優の鈴木梨央さんが、「一八歳成年に必要な金融知識」をテーマに



左から若田部副総裁、鈴木梨央さん、山本由里さん（対談司会者）

編集後記

■対談では、ジャズピアニストの佐藤允彦氏と野口旭審議委員にお話しいただきました。国や時代とともに変化するジャズの本質は何か、さらには今だからこそ感じるライブ演奏の意味合いなど、大いに語っていただきました。まさに、ジャズを愛するお二人によるインプロヴィゼーション（即興演奏）の協演となっています。

■インタビューでは、女子プロサッカーリーグ「WEリーグ」の初代チェアを務められた岡島喜久子氏取材しました。岡島氏は日本女子サッカーの黎明期を支えたアスリートであるほか、金融業界でも日米を股にかけて活躍されました。その岡島氏の「目の前に選択肢があったときに、どっちが楽しそうか、好きかで選んできた。そうすると自分の選択に責任を持つことができるし、一生懸命になることもできます」というお話は説得力抜群でした。

■地域の底力では、北海道の鶴居村を取り上げました。村の皆さまが、愛する地元の自然の魅力を再発見し、これを大切に保護するとともに、村の発展につなげておられます。多くの地域の地域創生のヒントにもなる取り組みではないかと感じました。（上口）

[アンケート募集中]

「にちぎん」に関するご意見・ご感想は、アンケートよりお寄せください。

日本銀行のホームページからもご回答いただけます。

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。

(https://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ (<https://www.boj.or.jp/>) をご覧ください。

にちぎん 2022年冬号
編集・発行人 上口洋司
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町2-1-1
☎03-3277-1609



デザイン 株式会社市川事務所
印刷 株式会社アイネット
禁無断転載

対談を行いました。
▼対談では、今年度新成人となる鈴木さんご自身の思い、成年年齢の引き下げで変わることに、金融教育のご経験などについて伺いました。
ほかにも、鈴木さんが成人になったら買ってみたいものや、若田部副総裁の子どもの頃の夢など、なかなか聞けない貴重なエピソードも盛りだくさん！
さらに、二〇二一年十一月に金

融経済教育推進会議（注）が開講したeラーニング講座「マネビタ」人生を豊かにするお金の知恵」を、実際に受講された鈴木さんからの率直な感想なども掲載しております。
▼知るぼるとホームページでは、対談の動画および全文を掲載しているほか、金融広報中央委員会・武井敏一会長の寄稿文もお読みいただけます。



マネビタのeラーニング講座のロゴ

また、対談の中で紹介されている「マネビタ」は、こちらのQRコードから受講登録ができますので、ぜひご確認ください。受講は無料です。

（注）わが国の金融経済教育に関する諸課題への取り組みを審議することを目的として、二〇一三年六月に設置された会議。金融広報中央委員会が事務局を務める。





from Singapore

シンガポール子育て事情

保育園の先生：「お子さんお熱はありませんが鼻水が出ていますので、すぐお迎えに来てください」

保護者：「(今日はプレゼンに当たっているのに、どうしよう……)」

こうした光景が、この小さなシンガポール島では今日もたくさん見られていることでしょう。シンガポールでは、保育園への通園が可能となる体調管理の基準が日本と比べて厳しく、新型コロナウイルスの感染拡大により、一層厳格な運用がなされるようになりました。働く保護者としては、わが子の健康を真剣に祈る綱渡りの毎日です。また、外国籍の子どもには保育園費用の援助は一切無く、保護者は別の意味でも切ない思いをすることになります。

では、シンガポールは子育て中の親にとって血も涙もない環境なのかと問われれば、そんなことはありません。合計特殊出生率こそ1.12(2021年)と日本の1.30(同年)より低い水準にあるものの、

住宅支援や税控除を含む充実した結婚・出産・育児支援のための政策パッケージが用意されています。一例を挙げると、就労の有無にかかわらず保育園に入園しやすい環境にあり、保育園の選択肢も非常に多いことは特徴的です。

また、シンガポールの人々は大変子どもが好き。南国特有の寛容なお国柄もあり、街へ出れば子どもたちへの温かい気遣いや、言葉がけ、まなざしを多く感じます。例えば、バスや電車ではベビーカー付近の乗客の方々がさりげなく乗降の手助けをしたり、座席や場所を譲ってあげたりしている光景は珍しくありません。一つ一つは大げさなことではありませんが、こうした人々のさりげない心遣いやおおらかさ、そして温かいホスピタリティーは、シンガポールの魅力の一つと言えるでしょう。

(ASEAN+3マクロ経済リサーチオフィス、シンガポール)

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。

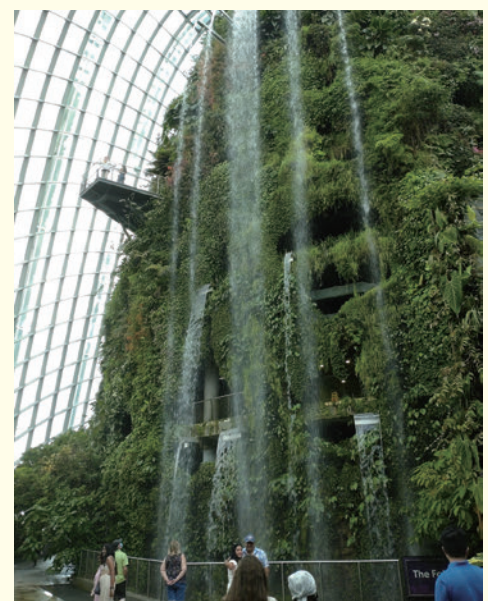


シンガポールのシンボルとも言えるマリーナベイ・サンズ。夜景も美しく、多くの観光客や家族連れでにぎわう。



上/屋内植物園 Gardens by the Bay は人気の観光地で、子ども連れの家族も訪れる。空中遊歩道からはきれいな夜景を望むこともできる。

右/ Gardens by the Bay の屋内。大きな人工滝があり、大人は涼を感じ、子どもは滝から舞う水しぶきを楽しめる。





にちぎん